GAINAX総監修ビジュアル・ガイドブック

週刊

新訂版

EVANGELION CHRONICLE

エヴァンゲリオン・クロニクル

Mechanic Sheet
第7使徒イスラフェル
戦略自衛隊兵器

Character Sheet
赤木リツコ B

Tactics Sheet
第10使徒サハクィエル戦

Timeline Sheet
死に至る病、そして

Installation Sheet
日本重化学工業共同体

Extra Sheet
用語辞典／企画書／トピックス

第7使徒 イスラフェル

SEVENTH ANGEL ISRAFEL

顔面 FACE

背面 BACK

前面 FRONT

ぬわぁんてインチキっ!!

(葛城ミサト)

DATA

呼称：7th ANGEL
第7使徒

天使名：ISRAFEL
イスラフェル

象徴：SYMBOL
音楽

能力：ABILITY
分離・合体
怪光線
鉤爪

関連事項 RELATED MATTERS

- n²爆雷
- 二点同時過重攻撃作戦
- N参号作戦
- 使徒
- 特殊訓練器

国連第2方面軍によるイスラフェルへのN参号作戦で使用。使徒の構成物質の28%を焼却、6日間の足止めに成功した。

分離能力によってEVAを翻弄した使徒

単独にして複数というイレギュラーな使徒。常識外の能力を持つ使徒ではあるが、単一の生命体である使徒の複数同時展開は、NERVにとって想定外だったと考えられる。幸いだったのは、分離能力が攻撃に反応して行なうという受動的な行為であったことで、分離による増殖という能動的な能力ではなかった点である。また、分離した個々の戦闘力がさほど高くなかった点も救いであろう。

駿河湾臨海部に上陸したところをEVA2機によって迎撃されたイスラフェル。その際2体に分離してEVAを撃破するも、国連軍のn²爆雷を受け6日を再生に費やす。再侵攻後、初号機と弐号機のユニゾンによる攻撃で分離中のふたつのコアを同時破壊され殲滅された。

イスラム教の伝承上ではイスラフェルは、トランペットを吹いて最後の審判の訪れを伝える天使であるとされる。また、アラーの言葉を伝えたというジブリールに先んじて、ムハンマドの下に初めて訪れた天使だという。

紀伊半島沖を通り、海中から駿河湾臨海部へと上陸したイスラフェル。迎撃態勢を整えていたEVA2機により先制攻撃を受ける。

分離後はそれぞれ甲・乙と呼称される。2体に分離及び合体する特殊な能力を有し、息の合わない2機のEVAを一蹴した。

完璧なユニゾン攻撃を仕掛ける2機のEVAによって追い込まれ、最後は合体の瞬間のコアをふたつ同時に狙われ殲滅された。

イスラフェルの体構造

まるで複製のような分離を可能とする。そのため身体はES細胞（身体を構成するあらゆる細胞に分化できる分化多能性を持つ）のようなもので構成されていると考えられる。傷の再生能力はそれほどでもなく、焼却された28％の身体部分の再生に6日を有した。

切断面からはピンクの肉塊しか見えない。そのため、内臓などの器官を有さない単細胞生物のような構造を持つと推測される。

① 分離・合体能力を有す身体

再生能力を持つプラナリアのごとく、身体の一部ではなく全身を丸ごと再生するような分離能力を持つ。また、S²機関の成せる業か、傷を負うことで分離・合体し、その際の身体再構築で肉体を新たにし、ダメージを軽減していると考えられる。

まるで脱皮するように、新たな肉体が身体を突き破って現れる。なお、分離した個体は独自に活動することが可能。

ダメージを負うことで分離、または再統合して損傷を無くす能力は、究極のダメージコントロールともいえる。

② 怪光線を放つ胸部の顔

第3使徒サキエル、第14使徒ゼルエルが使う光線と同様の攻撃手段を備える。とはいえ第7使徒イスラフェルの光線は威力が低く、防御用の装甲板で十分に防ぎ切れる程度。

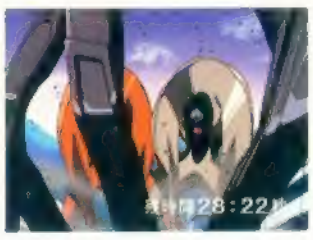
分離前は陰陽を表す太極図のような顔を持ち、眼窩のような部分は瞬きのようなリアクションを見せる。

使徒の怪光線は顔のような部位から放たれるという共通点を持つ。なお、分離前も使えるかどうかは不明。

←分離時の胸部の顔

③ 鈎爪のような手

鋭利な刃物のごとき切れ味を誇る3本爪の手。自らの身体を武器とする使徒は多く、イスラフェルもその例に洩れない。



分離したイスラフェル2体がかりの怪光線を防いだ装甲板だったが、近接した鈎爪の一閃によってあっさりと切り裂かれている。

分離したイスラフェル

イスラフェルの活動記録

紀伊半島沖を潜航中、巡洋艦「はるな」によって発見されたイスラフェル。NERVは迎撃システムの復旧率26％（実戦での稼働率0％）であった第3新東京市での迎撃を諦め、打って出る。駿河湾臨海部より上陸した使徒はEVA2機と交戦。直後の午前10時58分15秒、甲と乙2体に分離し、甲の攻撃で初号機は駿河湾沖合2kmに水没、その20秒後に乙は弐号機を下す。午前11時3分に作戦遂行を断念したNERVは国連軍に指揮権を譲渡。その5分後にN参号作戦によるn²爆雷で損傷を受けるも6日後に再侵攻。初号機と弐号機との再戦で2機のユニゾン攻撃を受け殲滅された。

初号機の援護を受け、回り込んだ弐号機のソニックグレイブによって両断されたイスラフェルだが、2体に分離してEVA2機を瞬く間に活動不能にする。

EVA2機のユニゾン攻撃により、分離したふたつのコアを同時に破壊されたイスラフェル。その間62秒。およそ1分という使徒戦中最短の時間で殲滅された。

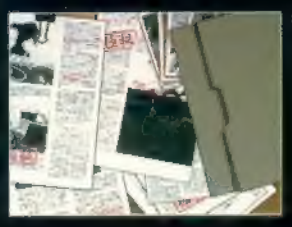
イスラフェル侵攻記録

- 駿河湾臨海部にてEVAと交戦
- 紀伊半島沖を潜航して襲来
- 2体に分離して初号機と弐号機を撃破
- n²爆雷を受け損傷
- 自己修復を終えて再侵攻
- EVA2機と再度交戦、二点同時過重攻撃を受け活動停止
- イスラフェル殲滅

特記事項

二点同時過重攻撃作戦

NERV特殊監察部の加持リョウジによってもたらされた第7使徒への対抗策。それはEVA2機のユニゾンにより、分離した使徒のコアを同時に破壊する作戦であった。



初戦のデータ分析の結果、イスラフェルの弱点が判明。わざと分離させてダメージを与え、合体する瞬間にふたつのコアの同時破壊を狙う。

二点同時過重攻撃を短時間で可能とする最善策は、音楽に合わせたユニゾン攻撃を特訓によって身に付けることであった。

6日でユニゾンを可能とし、見事にイスラフェル殲滅を成し遂げた。しかしながら最後の詰めが甘く、ブザマなフィニッシュを飾ることに。

©GAINAX・カラー/Project Eva. ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

母親の影を追い続け

赤木リツコ
RITSUKO AKAGI

報われぬ最期を迎えた女性

Illustration by Youichi Fukano

赤木リツコ

RITSUKO AKAGI B

個人情報

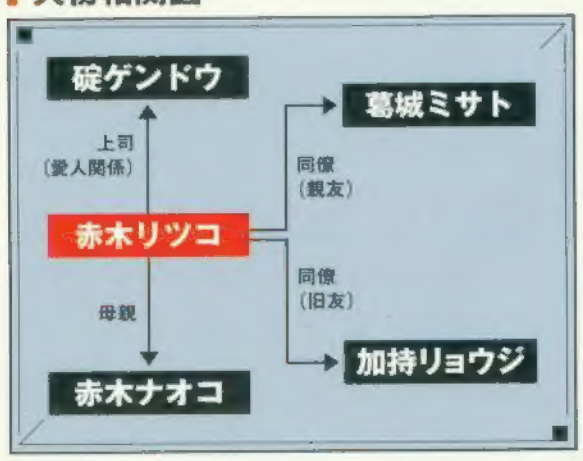
名前	赤木リツコ
年齢	30歳
国籍	日本
生年月日	A.D.1985/11/21
血液型	B型
所属	NERV/技術開発部技術局一課

赤木リツコという女性が、NERVにおいて最高司令官の碇ゲンドウ、副司令官の冬月コウゾウに次いで、真の目的――人類補完計画に最も近しい人物であることは間違いない。E計画の責任者としてEVAの運用を任されているだけでなく、MAGIシステムの管理やEVAの兵器設計など、NERV内の技術的な側面を一手に引き受けている彼女が、多くの機密事項に通じているのは当然のことである。彼女の存在がなくては、NERVにおける様々な計画の推進に大きな支障が出るといっても過言ではなく、彼女の技術者としての力量には計り知れないものがある。

しかし、リツコがそういった重要な位置に立つこととなったのは、ただ「非常に優れた技術者である」という理由からだけではない。彼女は、碇ゲンドウと密通していたことによりNERVの真の目的に近付いてしまったのである。特別な関係で繋がれることにより、彼女はその技術力のすべてを余すところなくゲンドウ――結果的にNERVという組織に捧げることとなる。クールで理知的な技術者としての顔の裏にはひとりの「女」としての顔があり、結果としてそれが彼女を報われぬ死へと誘うこととなる。

そうして彼女が辿ることになった道は、結果的に母親である赤木ナオコと、非常に似通ったものだった。基本的に物事をデータで捉える性質を持ったリツコという女性が、感情によって支配され利用されていたというのは皮肉な事実である。母娘揃って、利用されるに足るだけの特異な才能を持っていたことが、不遇な運命を招く結果となったのである。

人物相関図



関連事項

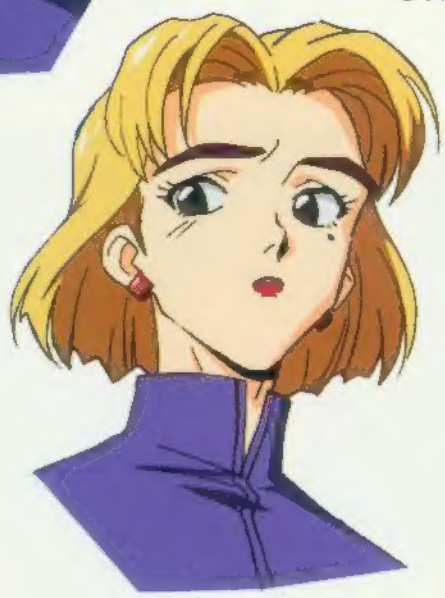
- 碇ゲンドウ
- 赤木ナオコ
- 葛城ミサト
- 伊吹マヤ
- 加持リョウジ

特務機関NERVの最高司令官。秘密結社ゼーレとも繋がりを持ち、人類補完計画の責任者も兼任する謎の多い人物。

表情

←わずかに眉をひそめるリツコ。感情はあまり表に出さないが、時には不快感を露わにすることもある。

尽くしてきたゲンドウに「失望した」と告げられ、激昂するリツコ。それまで抑えていた感情を一気に爆発させた。



→リツコは時折、このような困惑した表情を見せることもある。神経質な性格を持つ彼女らしい表情のひとつといえるだろう。

→彼女には珍しい、声を張り上げているような表情。しかし、それでいて冷静さは失われていないように見受けられる。

私服

→現在は、どちらかというと身体にフィットする服を好んで着ている様子のリツコ。しかし大学生時代の彼女は、ゆったりとしたイメージのワンピースを着用することもあったようだ。

→青を基調としたワンピースに身を包んでいるリツコ。寒色系の服装を好むのは、学生の頃から変わっていないようだ。

NERV内では、白衣を着用していることが多いリツコ。だが、普段着などの私服姿を見せる機会も少なくない。全体的に歳相応の落ち着いた服装である。

©GAINAX・カラー/Project Eva. ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

赤木リツコの活動記録

←↓EVA3号機が使徒に寄生された際、負傷したリツコ。その直後に仕事に復帰していたことから、彼女の職務に対する厳しい姿勢が窺える。

←↓加持、ミサトと共に、友人の結婚式に出席した際のパーティドレス。ダークグリーン一色で飾り気のないドレスは、クールなリツコらしい。派手めな服装を好む親友のミサトとは対照的である。

EVAやMAGIのメンテナンス、EVAとパイロットとのシンクロ実験などにおけるデータ収集を行なうのがリツコの主な業務である。あまり目立つものではないが、NERVの活動を支える重要な仕事であることは間違いない。さらに彼女の能力の高さが窺われる事実としては、対使徒戦において、何度か戦術指南を行なっていることも挙げられる。その中でも特筆するべきは、第11使徒イロウルがNERV本部内に侵入したときの活躍であろう。同使徒の特徴を正確に把握したリツコは、自滅促進プログラムを送り込んで自壊させることに成功した。これは、EVAを一切使用することなく使徒を殲滅した唯一の事例であり、彼女の科学者としての力量を明らかとする戦いだったといえよう。

その後も彼女は、EVA初号機に取り込まれた碇シンジのサルベージ計画を指揮。また、ゼーレが総力を上げてMAGIへのハッキングを試みた際、Bダナン型防壁を展開して侵入を阻止するなど、重要な役割を担った。これらの活躍は、彼女以外の誰も成し得なかったといっても過言ではないだろう。

MAGIが使徒に侵入されNERV本部内の誰もが混乱に陥った中、システムの処理スピードを遅くするための処置を指示するリツコ。この一瞬の判断で、使徒の侵入速度が急激に遅くなり、緊急対策会議を行なう時間を稼ぐことができた。

汚れたと感じたときに潔癖症の辛さがわかると、部下のマヤに説くリツコ。汚れてしまった自らに言い聞かせるかのようでもあった。

NERVにおける役割

一般職員が知り得ないNERVの秘密を握っているリツコは、最高司令官であるゲンドウの数少ない側近である。ゲンドウが秘密裏に推進する人類補完計画に力を貸すことを己の役割としている彼女は、その職務上の機密保持のため、他の職員を結果的に騙すことになったり、倫理観に反するダミーシステムの開発を行なうなど、NERVにおける暗部の一端を担う存在となっている。その結果として、NERVの深部に疑いを持つミサトに対しては、ある意味憎まれ役のようになってしまっている。しかし、彼女とてゲンドウの真意をすべて知らされていたわけではなく、実際には被害者ともいえる立場にあったといえよう。

MAGI管理者としての役割

MAGIを使徒の侵食から守りきったリツコ。母の分身たるMAGIを守りたかったわけではなく、科学者としての判断によるものと口にしていたが、その本心は明らかではない。

Bダナン型防壁を展開し、5ヶ国のMAGIタイプコンピュータによるハッキングから完全防御を行なったリツコ。この際、MAGIに対してまるで母に話しかけるようにしていたのが印象的である。

ゲンドウに造反したことにより、一時は独房に拘束されたリツコ。だが、後にゼーレが仕掛けてきたハッキングに対しMAGIシステムの自律防御を展開する。それは、MAGIを開発したナオコの娘であり、システムを把握しているリツコにしか成し得ないことであった。しかし、一度裏切ったゲンドウに大人しく従ったことには理由があった。自律防御を行なった際、彼女は自らの役割に反し、MAGIのプログラムを変更して本部の自爆を謀ったのである。MAGI自身が拒絶したため自爆には至らなかったが、開発者の娘、ゲンドウに協力する者といったすべての役割を捨てようとしたうえでの選択だったと考えられる。

碇ゲンドウとの関係

ゲンドウが愛情を向ける存在であるレイへの嫉妬から、クローンを破壊するリツコ。ゲンドウに対する愛憎が極限に達した彼女に、感情を抑えきることは不可能だった。

自分に銃口を向けたゲンドウの言葉に対し、「嘘吐き」と返したリツコ。どんな言葉が向けられたのかを知っているのは、当人たちと、その場に居合わせたレイだけだ。

NERV最高司令官である碇ゲンドウと部下であるリツコは、特別な男女関係を結んでいた。ゲンドウとしてはその関係により有能な科学者であるリツコを繋ぎとめ、利用したに過ぎない。リツコもそれを頭では理解していたようだが、ゲンドウを男性として愛してしまったがゆえに、彼の要求を拒むことはできなかった。その後、リツコの愛憎入り混じった感情は迷走し、最終的に彼女はゲンドウとの心中を目論むも、失敗して彼の手によって撃たれた。以前、男と女はロジックではないと言っていたことのあるリツコだが、自身でその言葉を体現することとなってしまったのである。

加持リョウジとの関係

久々に再会した加持に突然抱きつかれても、クールな反応を返すリツコ。少なくとも彼のことを嫌ってはいないようだ。

親友のミサト同様、リツコにとって大学時代からの知己である加持リョウジ。リツコは学生当時には、親友の恋人である彼に対し「軽い感じが馴染めない」との印象を持っており、苦手意識を抱いていたようだが、現在は良き友人関係にあるようだ。互いを「リョウちゃん」「リッちゃん」などと呼んだりしていることや、揃ってミサトをからかったりしているところからも、そのことが窺える。

ただ、加持はNERV、日本国政府、ゼーレの三重スパイであり、リツコもそれを承知していた。友人としてある程度の忠告を与えることもあったが、実際にはそれなりの距離を置いていたようである。

葛城ミサトとの関係

初号機が第12使徒に取り込まれた際、初号機さえサルベージできればシンジの生死は問わないと言い切ったリツコ。この頃から、ミサトのリツコに対する不信感が顕わになっていく。

普通に会話をしているようでも、その内容はどことなく刺々しいものになってしまう。EVAに関する様々な問題が表面化していく中、ふたり共、余裕をなくしていったようだ。

葛城ミサトは、リツコの学生時代からの親友である。NERV入所後も何度かミサト宅を訪れるなど、親密な様子が窺われる。しかし、NERV内部の機密事項について知らされていないミサトが、ゲンドウらの思惑について疑いを持ったことにより、同時にリツコに対する不信感も生まれることとなる。リツコにとってのミサトは、プライベートな友人関係としては好ましい相手ではあったのだろうが、だからといって職務上の機密を漏らすような存在ではなかった。職務に私事を差し挟むことを良しとしなかったとも、自らとゲンドウとの関係をミサトに悟られたくなかったとも考えられるが、その真意は定かではない。

赤木ナオコとの関係

ゲンドウとナオコの密会現場を目撃してしまったリツコ。母に対し、複雑な感情を持つ原因となった出来事だったと思われる。

母親、科学者、女としての3つの人格が移植された、ナオコの分身ともいえるMAGI。それを第11使徒から守りきった際、リツコは母に対し、科学者としては尊敬していたが女としては憎んでさえいた、とこぼした。母が存命中は良好な関係を保っているように見えたが、その裏では様々な感情が入り交じっていたと思われる。

後にリツコは、母と自分の共通の愛人であるゲンドウを、MAGIもろとも葬り去ろうとする。しかし、女としての人格が移植されたカスパーに裏切られることとなる。女としてのナオコがリツコの行動を阻んだとも見て取れる。

©GAINAX・カラー/Project Eva. ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

タクティクスシート
Tactics Sheet

第10使徒サハクィエル戦 Sheet 15

THE TENTH ANGEL SAHAQUIEL ANNIHILATION BATTLE

Illustration by Tomotake Kinoshita

A.T.フィールドを展開して落下してきた第10使徒サハクィエルを直接手で受けとめる初号機。初号機もA.T.フィールドを全開で発生させ、その反発力を用いて、巨大な質量体である第10使徒を短時間ながら、持ち上げ続けることに成功した。しかし、初号機の腕部はやはり耐久力の限界を超え、破損してしまう。

第10使徒サハクィエル戦

高々度より侵攻する使徒へのハイリスクな要撃作戦

TACTICS SHEET

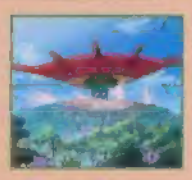
インド洋上空の衛星軌道上に出現した第10使徒サハクィエルに対し、当時、NERV本部の全権を委任されていた葛城三佐が編み出した戦術プランは単純明快ではあるが、極めてリスクの高い作戦であった。それは自らを質量爆弾と化して落下してくる使徒を地表間際で3機のEVAシリーズで受けとめ、使徒の弱点＝コア部分を直接攻撃するというもの。これはEVAが使徒を空中要撃する手段を持ち得なかったための苦肉の策であったといえよう。汎用兵器として開発されたEVAは、陸上、海中、溶岩流内など様々な環境において、柔軟な戦術的運用が可能であるが、唯一苦手とするのが空中戦、および対空戦闘であったのだ。

本作戦は目標が着弾点を修正しつつNERV本部へと接近していた点、および各使徒がNERV本部へ直接侵攻してきた前例に頼って立案された。しかし、それ以上の根拠はなく、使徒による広範囲のジャミングのために正確な落下位置の予測は不可能、想定される目標の落下エリアは第3新東京市のほぼ全域、また仮に落下地点に到達したとしても使徒自体の質量にEVAが持ちこたえられない可能性ありと、不確定要素を多分に孕んだ極めて無謀な作戦であったといえよう。さらに使徒迎撃のためのEVA各機の初期配置は、葛城三佐の直感で決定されるなど作戦とは言いがたい運任せな采配もあり、現場においても作戦を疑問視する声は多かったようだ。実際にMAGIが算出した作戦成功確率は0.00001％、と勝算はほぼないに等しい数字であった。第3新東京市から一般市民を完全退去させる特別宣言D-17発令も被害を最小限にするためのものであり、作戦失敗の可能性が多分にあったゆえの判断であったと考えられる。

結論をいえば、葛城三佐の采配は見事に的中、初号機の破損と使徒の爆発による市街地外郭の丘陵の消滅こそあったものの、NERVは使徒迎撃に成功する。しかし、もしEVAが充分な対空戦闘能力を有していれば、これほどのリスクを冒すことなく、直接空中での要撃も可能であったはずである。この経験を踏まえてか、以後、EVAには地対空迎撃戦闘にも対応可能な高性能の質量センサー装備の重火器であるポジトロン20Xライフル、およびポジトロンスナイパーライフル改が配備され、第15使徒戦では実戦投入されている（ただし、この戦闘においては使徒が射程外に止まっていたため、充分な戦果を挙げることはできていない）。また、より有益な対空戦闘手段として、EVA自体に飛行能力を与える空中戦装備も計画され、これはのちのEVA量産機に標準装備されることとなる。

関連事項 RELATED MATTERS

- 第10使徒サハクィエル
- A.T.フィールド
- コア
- NERV本部
- D-17



突如、インド洋上空に出現した第10使徒サハクィエル。分裂させた本体の一部、および本体を質量爆弾として攻撃を行なう。

タクティクスシート
Tactics Sheet

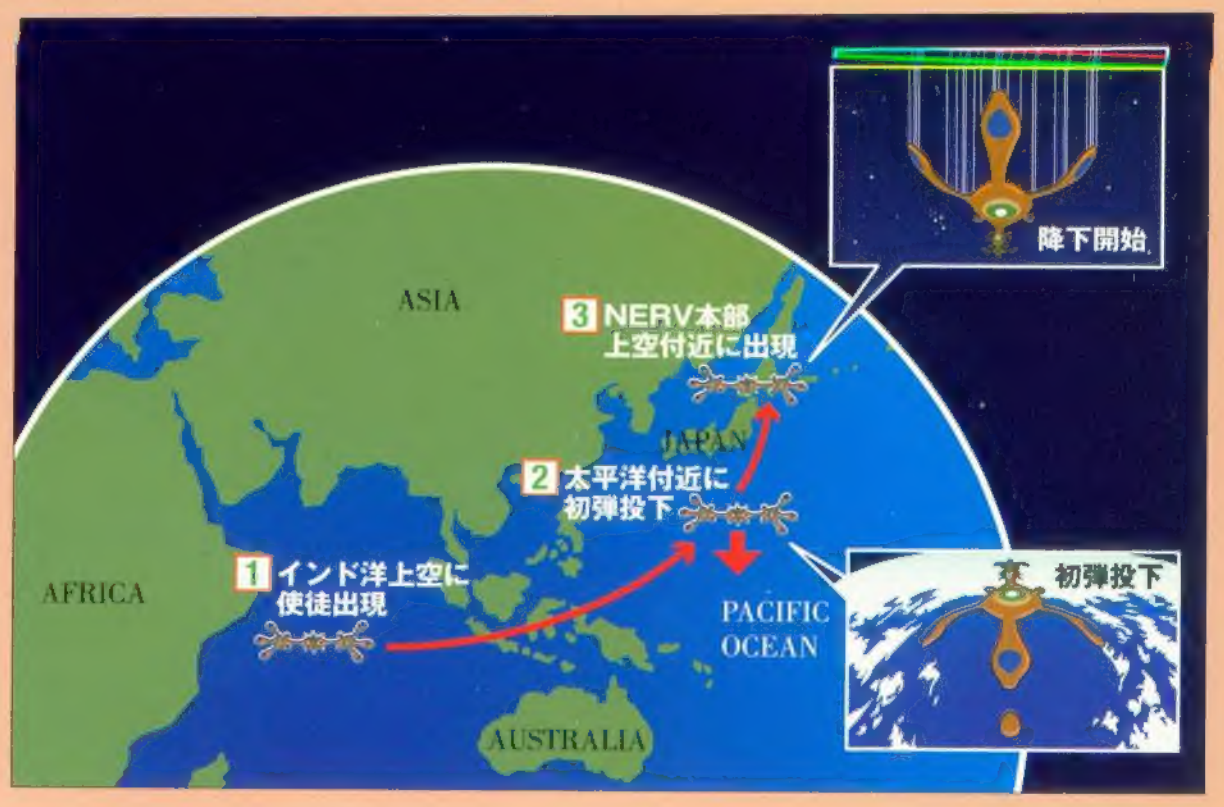
第10使徒サハクィエル戦
THE TENTH ANGEL SAHAQUIEL ANNIHILATION BATTLE

Illustration by (twinbell) Tokiko Yuzawa

使徒の出現と、その侵攻

使徒の出現は早期に察知したものの、NERV本部はその侵攻を阻むための有効な手段を持ち合わせていなかった。サーチ衛星の警戒網、n²航空爆雷による迎撃システムこそあったが、強固な防衛ラインとは言い難く、高々度からの攻撃への弱さが露呈している。

インド洋上空においての使徒出現の第一報が本部にもたらされたのは、探知からわずか2分後のことであり、早期警戒システムは充分に機能していたといえよう。しかし、分析のために邂逅軌道へ移動させたサーチ衛星は使徒のA.T.フィールドを利用した攻撃により圧壊。また、n²航空爆雷による牽制攻撃を行なうものの、これもわずかな足止めにしかならなかった。使徒は自らの体の一部を質量爆弾として地表へと投下しつつ移動、太平洋上空で消息不明となったのちにNERV本部上空へと到達している。その間、有効な対空戦力に乏しいEVA、およびNERVには、使徒を空中で迎撃することができず、結果的に本部直上での要撃作戦を決行することとなる。しかし、使徒の強力なジャミング能力のため、目視以外での落下位置予測は不可能であり、万一失敗した場合、本部を含む半径数十kmが消失することが容易に予測されたため、D-17の発令による第3新東京市の市民の退去という危機的状況に陥ってしまう。



1 インド洋上空に使徒出現
TACTICS SHEET

インド洋上空に使徒の出現を確認。NERV本部は、より詳細なデータ収集のため、サーチ衛星を使徒との邂逅軌道へ乗せ探査を開始する。しかし、目標に接近した直後、使徒のA.T.フィールドによりサーチ衛星は撃破され、データ収集は中断された。

インド洋上空の衛星軌道上に出現した使徒は、これまで確認されたどの使徒よりも巨大な質量を有していた。その浮遊する様は、圧巻であった。

2 太平洋付近に初弾投下
TACTICS SHEET

使徒は太平洋上空へと移動。分離した本体の一部を質量爆弾として地表へ向けて落下させた。初弾は太平洋上へ着弾、第2射以降は日本列島へと近づいていく。この行動から使徒は誤差修正しつつ、NERV本部上空へと接近中と推論された。

使徒は本体の一部を分離させ、大気圏内へと落下させた。位置エネルギーを利用した質量爆弾こそ、使徒の最大の攻撃手段であった。

3 NERV本部上空付近に出現
TACTICS SHEET

使徒のジャミングのため、目標の現在地をロスト。EVAによる要撃作戦敢行にともない、第3新東京市から市民の緊急退去が行なわれた。また、NERVは広域の落下予測地点をカバーできるようにEVA各機を配置。本部上空に飛来する使徒に備えた。

NERV本部上空で光学観測にて捉えられた使徒は、予想通り本体ごと地表へ向けて落下。A.T.フィールドにより破壊力を高めている。

技術調書

サハクィエルの能力

衛星軌道上から侵攻してきた使徒は、瞳を思わせる奇妙な紋様とアメーバ状のボディが、外見上の特徴となっている。その全長はEVAを遥かに上回る。この使徒の攻撃の特色は、自身の体の一部、もしくは全体を質量爆弾として大気圏内へ投下するというもので、その際A.T.フィールドの特性を活かした加重力の増大、さらに落下による物理的運動エネルギーとの相乗効果によって、驚異的な破壊力を生み出している。さらに従来の使徒に見られなかったA.T.フィールドの用法として、接近する異物の破砕も見せた。また、使徒には広範囲にわたる強力なジャミング能力も備わっており、巨体であるにもかかわらず地上からの正確な位置の捕捉は困難を極めた。

地表へ向けて落下する使徒の体の一部。落下エネルギーとA.T.フィールドの相乗効果により強力な質量爆弾となっている。

巨大なサハクィエル自体が質量爆弾と化して落下、爆発した場合、本部周辺地域がすべて消失すると推定された。

n²航空爆雷による絨毯爆撃を受けるサハクィエル。しかし、これまでの使徒同様、通常兵器ではダメージを与えることはできなかった。

▼第10使徒サハクィエル

大気圏外を浮遊して移動するサハクィエルの体は、シンメトリックな曲線で構成されている。サイズもさることながらその形状に既知の生物のイメージはない。

追加報告

ロンギヌスの槍の回収

使徒出現時、NERV最高司令官である碇ゲンドウ司令は、冬月副司令と共に南極へと出向いていた。目的は「ロンギヌスの槍」の回収であった。正副両司令がそろって本部を留守にすることは異例なことであり、この任務の重要性をうかがわせる。しかし、時を同じくして使徒が出現、結果的にNERV本部は作戦課長である葛城三佐が、その全権を担うこととなった。

南極で「ロンギヌスの槍」の回収任務を完了し帰路に就く国連軍の船団。「ロンギヌスの槍」はセカンドインパクト発生の地に眠っていた。

碇司令と冬月副司令がそろって出かけるほど、この「ロンギヌスの槍」の回収は重要な任務であったようだ。

©GAINAX・カラー/Project Eva. ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

タクティクスシート
Tactics Sheet

第10使徒サハクィエル戦 Sheet 15

THE TENTH ANGEL SAHAQUIEL ANNIHILATION BATTLE

Illustration by (twinbell) Tokiko Yuzawa

衛星軌道より降下する使徒との戦い

3機のEVAにより高速落下してくる使徒を目測で捉えて、さらに目標を受けとめる無謀な賭けに近い作戦。だが、上空から落下してくる使徒に対するには、この手段しか残されていなかったのも事実であった。

EVA配置、および各機守備範囲

TACTICS SHEET
EVA零号機（改）——戦力配置#1

零号機が配置されたのは、芦ノ湖北部の旧御殿場付近の森林内であった。俊敏な移動を要求される本作戦での各機の装備は、プログレッシブ・ナイフのみと軽装であった。

TACTICS SHEET
EVA弐号機——戦力配置#2

弐号機の配置場所は、芦ノ湖南西部側。旧三島付近の国道沿いである。この各機の配置場所は、葛城三佐の直感という薄弱な根拠によるものであったと言われている。

TACTICS SHEET
EVA初号機——戦力配置#3

初号機が配置されたのは、芦ノ湖南東部に位置するダム近辺。旧湯河原付近である。結果的に、この初号機の配置場所が使徒落下地点にもっとも近接していた。

本作戦は、目標がNERV本部上空の高度2万mの位置に出現した段階で決行された。目標のロスト直前のデータから算出された落下予測地点は第3新東京市を含む周辺全域と不正確なため、EVA各機は半径約10kmを守備範囲として落下点へ移動、直接受け止めた後に攻撃という破天荒な方法が取られた。しかもMAGIの誘導は高度1万m位置まで、以降は光学観測のみで各パイロットの判断によるという、精密さを欠いたものであった。さらにEVAは内蔵電源のみの活動と時間制限まであり、極めて勝率の低い作戦であったといえよう。

特記事項

遺書の必要性

葛城三佐は本作戦決行に当たり、EVAのパイロット3名に対し遺書の希望について確認を取っていた。これは作戦の困難さを物語る事例のひとつであろう。もっとも葛城三佐は、EVA内部にいれば、A.T.フィールドによりパイロットは生存できるとも考えていたようだ。

作戦実行直前、葛城三佐は本作戦を志願任務とした。それでもEVAの各パイロットは作戦への参加を希望したが、遺書の方は必要ないとして辞退している。

対サハクィエル戦戦闘経緯

TACTICS SHEET

1 使徒、降下開始

芦ノ湖を囲むように3機のEVAシリーズを配置。使徒の出現、地表への落下を光学観測で確認しつつ、高度2万m地点到達をもってEVA各機は電源をパージ、予想落下地点へ全力疾走を開始した。

高速で落下してくる使徒に対して、全力疾走しながら目測で捉え、適切な位置へと到達するという本作戦の第1フェイズ。初号機はまずこの難題を見事クリアした。

2 初号機、使徒を捕捉

落下地点にもっとも早く到達したのは、初号機であった。最初に落下地点に到着した機体が、使徒を持ち上げる役割を担うことになっており、初号機はA.T.フィールドを全開にすることで見事に使徒を受けとめている。

目標が地表に激突する直前に、初号機は落下地点の丘陵に辿り着き、A.T.フィールドを全開。高出力のA.T.フィールド同士の干渉波により、周辺の家屋は吹き飛んだ。

3 零号機、弐号機による攻撃

次いで零号機と弐号機が落下地点へと到達、A.T.フィールドを全開にして初号機のバックアップを開始。まずは零号機が目標のA.T.フィールドをプログレッシブ・ナイフで切開し、コア部分を無防備状態にした。

使徒の落下地点に零号機と弐号機も到着。3機のA.T.フィールドによって大質量の使徒を支えつつ、第2フェイズである使徒への直接攻撃を零号機と弐号機が開始した。

4 使徒殲滅

零号機の攻撃により無防備となった使徒のコア部分に向けて弐号機がプログレッシブ・ナイフを突き立て、これを破砕した。コアを破壊され力を失った使徒は、大爆発を起し四散。最低限の被害で使徒殲滅を果たした。

零号機が目標のA.T.フィールドを切り裂き、間髪を入れずに弐号機が使徒のコア部分をプログレッシブ・ナイフで破壊。使徒殲滅に成功する。

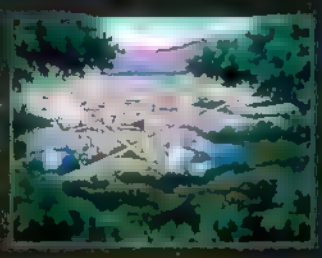
Illustration by Tomotake Kaishita

特記事項

特別宣言D-17発令

NERV本部が何らかの事態により、本部施設そのものを放棄しなければならない可能性が生じた場合、NERV権限において特例的に発布することができる特別宣言が、D-17である。これは本部施設に併設されているといっても過言ではない第3新東京市半径50km内からの一般市民の完全退去通告であり、日本政府により各省へ通達される超法規命令である。第10使徒サハクィエル戦では、同時にNERV本部内において同一目的意味合いを持つ部内警報Cが発令され、非戦闘員及びD級勤務者の退避が行なわれる。発令所詰めのオペレータも退避勧告職員のレベルに含まれるが、本作戦では彼らが発令所を離れることはなかった。

特別宣言D-17の発令により、第3新東京市より緊急退避をする一般市民の車の列。超法規的措置であるため、高速道路は全線下り(市外方面)となっている。

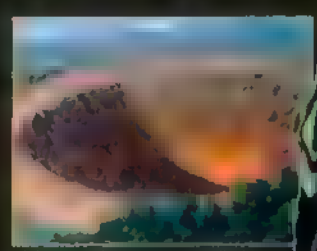


特別宣言D-17によって、第3新東京市はわずか数時間のうちに完全な無人状態となった。百項から避難訓練などを行なっているだけのことはある。

作戦報告

最高司令官不在時の使徒戦

使徒出現時に不在であった碇司令に代わり葛城三佐が全権指揮を執った今回のケースでは、指揮官の直感頼みの作戦に対し、現場での反発も少なからずあったとされている。もし、NERV並びにEVAに対空戦装備が充実していれば、また碇司令がいれば、もっと確実な作戦立案も可能であったかもしれない。しかし、結果を示せたからこそかもしれないが、碇司令は本作戦を現有戦力に鑑いての最善策と捉えたようで、作戦後に葛城三佐に対して苦言を呈することはなかったようだ。

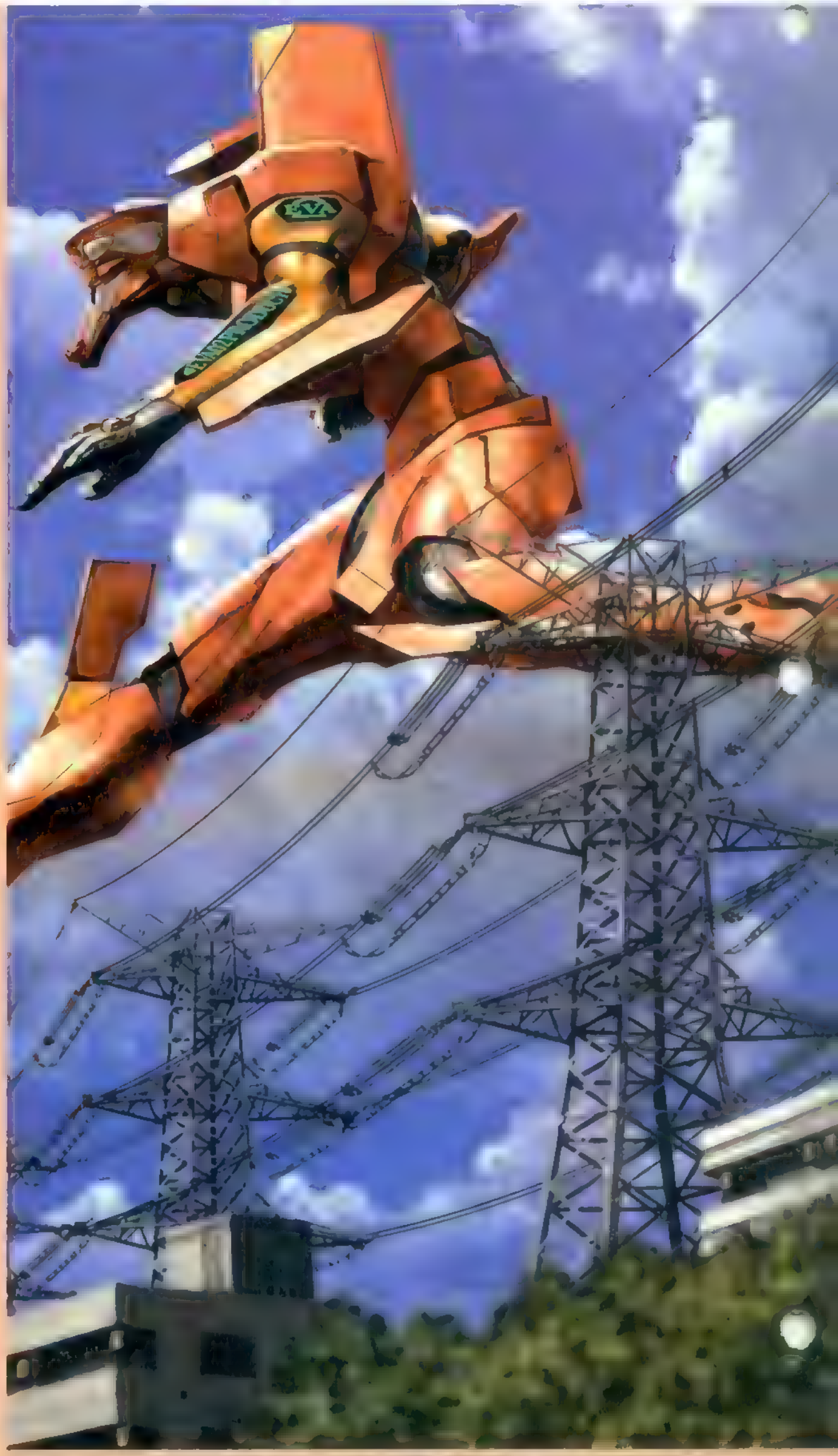


使徒を殲滅することには成功したが、本部付近の丘陵は巨大なクレーターになってしまった。

▶初号機

作戦により初号機は破損。大質量物体である使徒を1機で受けとめた初号機の両腕部は、それなりのダメージを負っている。

[illegible]の[illegible]作戦をかろ[illegible]は最小限だったといえよう。戦闘後、その日の夜には、[illegible]いつもの生活を取り戻した。



落下予測地点に向かって　あたかも陸上競技選手のように全力疾走する弐号機　[illegible]橋をハードルのように飛び越えて[illegible]た

©GA NAX・カラー Project E.va ©GAINAX・カラ　EVA製作委員会

新世紀年表

第十八話

死に至る病、そして

DESPAIR and DEATH

[redacted]

A.D.2015 ●第3新東京市

01 シンジ、朝食の仕度をする

いつもの朝、ミサトとシンジがダイニングで平穏な会話を交わしていると、「熱　いっ!!」と叫びながらアスカが駆け込んできた。どうもシンジが沸かしておいた風呂が熱過ぎたらしい。「……ゴメン」。シンジが謝ると、アスカは今度はシンジはすぐに謝ると言って怒りはじめる。「シンジって何だか条件反射的に謝ってるように見えんのよね！」「まぁまぁ、それもシンちゃんの生き方なんだから」。なだめるミサトにアスカは怒りの矛先を向け、最近のミサトはシンジに甘過ぎると言って指を突きつけた。

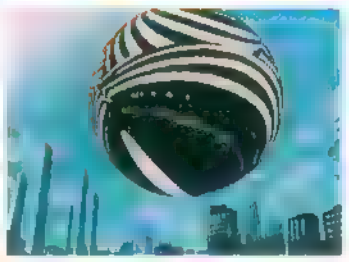
内罰的過ぎるとアスカに責められ、シンジは反射的にまた「ゴメン」と謝ってしまう

「加持さんとよりが戻　たから　」「他人に幸せ押し付けないでよね　」なぜか話が変な方向へ向かう。ミサトは加持とはなんでもない と否定するが　当の加持から誘いの電話か　アスカは偽善的で反吐が出ると去っていった

A.D.2015

04 第3新東京市上空に使徒、出現

突如、第3新東京市の上空に正体不明の物体が出現した。白黒の縞模様が全体に入った球状のそれは、ゆっくりと市街上を移動しはじめる。ただちに警戒態勢に入るNERV。だが、分析の結果、判明した識別パターンがオレンジであると知って、司令室にざわめきが走る。使徒ならば、識別パターンは青のはずなのだ。新種の使徒なのか？MAGIも解析できない事態に戸惑うスタッフたち。とはいえ、このまま手をこまねいているわけにもいかず、ミサトは3機のEVAを球体の周辺に配備するよう指示した。



謎の巨大な球体は　市街地の上空　なんの前触れもなく忽然と姿を現　した

未知の存在であることは間違いはないが　識別パターンは使徒とは異なる。これは本当に使徒なのか？　折りしも司令のゲンドウは不在。状況判断に悩みつつも　その場の責任者であるミサトはEVA全機の出動を命じた

[redacted]

2015年

アスカ、シンジに対抗意識を燃やす

▶

はじめてトップの成績を出す

シンジ、ハーモニクスのテストを受ける

▶

シンジ、朝食の用意をする

A.D.2015

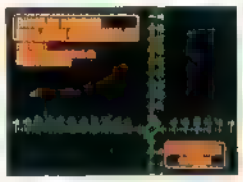
●NERV本部

03 シンジ、ハーモニクスの試験を受ける

テストの結果に、シンジは思わず笑顔を見せる

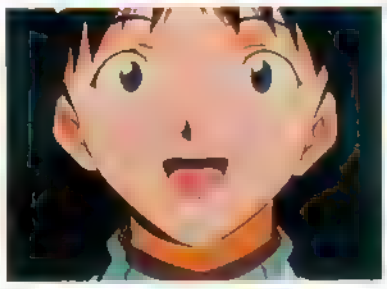
ハーモニクス試験中の制御室。シンジたちの様子を見守るミサトに日向がふと聞いた。「ミサトさん、なんだか疲れてません？」「いろいろとね。プライベートで」。苦笑いを浮かべるミサト。「加持くん？」。ずばりツッコむリツコに「うるさいわねっ」と言い返し、ミサトはシンジのテスト結果を覗き込んだ。映し出されたのはアスカを抜いてトップという好成績。ミサトは「これが自信につながればいいんだけどねぇ」と苦笑した。それは彼女の本心からの言葉だった。

リツコに怒ってみせるミサトだが、以前のようなとげとげしさはない



マヤのコンソール。映し出された試験結果は良好。ミサトはシンジの自信のなさを気遣う様子を見せる。

テスト結果を勇んで尋ねるシンジに、「ハイ、アイ、アー、No.1」と親指を立ててみせるミサト。



以前はすべてに無関心だったシンジだが、いまはテスト結果に顔をほころばせるようになっていた

07 アスカ、シンジに対抗意識を持つ

テスト後のロッカールームで、アスカはシンジをわざとらしく褒め称えた。だが無言で着替えを終えたレイが出て行くやいなや、険しい顔でロッカーを殴りつける。一方、シンジはテスト結果の喜びを抑えきれず、帰りのバスで「よしっ」と思わず声を出し、同乗の客に笑われてしまう。

妙に ハイなアスカ 一方のレイは、つもとおり無反応だ

実際のアスカの心はシンジへの対抗心に煮えくり返っていた

●第3新東京市

05 ミサト、使徒殲滅作戦を立案

ミサトは子供たちに、まず慎重に様子を見るよう指示した。だが先鋒を決める前にアスカがシンジを挑発し、ムっとしたシンジは、自分が先行として手本を見せてやると言い出す。ミサトが口を挟んだものの、すっかりやる気のシンジは「戦いは男の仕事！」と親指を立ててみせた。

アスカの挑発を受けたシンジは自信ありげに笑う

子供らに勝手に作戦の担当を決められ戸惑ったミサトと、苦笑するリツコ。

04 初号機、使徒に飲み込まれる

シンジを乗せたまま初号機は消失してしまう

いよいよ作戦が開始された。だが、残りのEVA2機が所定位置につく前に、シンジが勝手に発砲してしまう。そのとたん目標がかき消えた。動揺するスタッフの間に日向マコトの声が響く。「パターン・青。使徒発見、初号機の直下です！」。その言葉どおり、初号機の足元に大きな影が広がった。影はたちまち泥沼のように初号機を飲み込み、ついで周囲のビルも沈みはじめた。救出もままならず、ミサトは退却を命じるが、すべては遅過ぎた。

目標を定止めておこうとしたシンジは勝手な判断で発砲してしまった

影にずぶずぶと飲み込まれていく初号機。ふと気づけば、消えたはずの球体が初号機の真上に浮いていた。

「シンジくん、逃げて！」ミサトの叫びもむなしく、シンジと初号機は絶叫と共に消えてしまった。

退却命令に「待って！まだ初号機と碇くんが！」と答えるレイ。以前の彼女ならありえない反応だ。

初号機、使徒に飲み込まれる

▶

シンジ、独断で使徒に攻撃を仕掛ける

▶

ミサト、使徒殲滅作戦を立案

▶

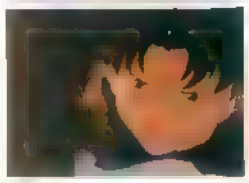
正体不明の物体を使徒と認定

第3新東京市上空に正体不明の物体が出現

●第3新東京市

09 ミサト、リツコと衝突する

そんな作戦を行なえば初号機もただでは済まない。そうミサトが指摘すると、目的は初号機の回収で、パイロットの生死は問わないとリツコは言い切った。思わずリツコの頬を叩くミサト。そんなに大事にする初号機とは、EVAとはいったい何なのか――詰め寄るミサトに、渡した資料がすべてだとリツコは答えるが、ミサトは信じるはずもなかった。



冷酷なリツコの言葉、憤るミサト。シンジは自分を信じてくれと言い、作戦指揮を取るため、その場を立ち去る

ケンスウやシンジはいない。何を目論んでいるのか、まだ自分の知らない秘密があるのだと、ミサトは唇をかみ締める

A.D.2015 ●ディラックの海

10 シンジ、もう一人の自分と向き合う

使徒のなかでシンジは不可思議な光景を見ていた

初号機が影に囚われてから12時間以上が過ぎた。死の恐怖にさいなまれつつ助けを待つシンジだったが、いつしか彼は奇妙な幻想のなかにいた。電車に乗っているシンジ。目の前にいる誰か。その誰かは、自分はもうひとりの碇シンジだと言った。他人の中の碇シンジが怖いんだろうと指摘するもうひとりのシンジ。いやなことから逃げ続けているんだろう。楽しいことだけして生きられるはずがないのに……そんな風に責められたシンジはたまらなくなり「楽しいこと見つけて、そればっかりやってて、何が悪いんだよ！」と絶叫する

シンジは機体を生命維持モードに切り替え、救助を待っていたが

やがてLCL溶液が濁り出した。繋がった血の匂いにパニックを起こしたシンジは、狂ったように叫びながら内壁を叩く

幻想のなかでもうひとりのシンジは、「自分は要らない子だ」と言い、彼のトラウマを刺激する

母を失ったあとに逃げ出したのは、父ではなく自分のほうだったと、夢のなかで思い出すシンジ

●第3新東京市

13 ミサト、シンジの無事を喜ぶ

なんとか生還したシンジ　一方　ケントウらは

誰かが必死に呼ぶ声にシンジが目を開けると、目前に涙を浮かべたミサトがいた。泣きながら抱きつくミサトを朦朧としつつ受け止めたシンジは「たた、会いたかったんだ　もう一度……」とうつろに呟く。その後すぐ、初号機の洗浄作業が始まった。「私は今日ほどこのEVAが恐いと思ったことはありません」。作業を見守るゲンドウへ、そばに立つリツコが語りかける。「本当にEVAは味方なのでしょうか……私たちは憎まれているのかもしれません」。いつものように静かに語るリツコの声は、どこか慈しいを帯びていたが、ゲンドウは黙ったままだった。

シンジを覗き込むミサトは、目に涙を浮かべていた

シンジは、かみ締めてひたすら泣きじゃくるミサト。アスカは「叱るんじゃなかったの？」と憮然とした顔つきで呟く

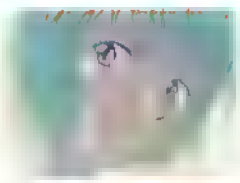
ミサトが何か感づいているかもしれないという報告に「今はいい」とゲンドウはすげない。

レイやシンジくんがEVAの秘密を知ったら許してもらえないでしょうね」とリツコは言った

A.D.2015 ●NERV本部

14 シンジ、病院に搬送される

病院に収容されたシンジは、ついてくれていたレイに、もう大丈夫と笑ってみせた。「そう、よかったわね」何気ない一言に夢の母が重なり、ハッとなるシンジ。やがてレイが部屋を出ていくと、すぐ外でアスカがあわてて隠れるのが見えた。何だかんだ言っていても、アスカも気にしていてくれたのだ。そう知って、シンジは思わず吹き出すのだった。



「よかったわね」と言い残るレイ。一方、アスカは自分もシンジが心配なんだ、素直ではなかった

やがて笑いやんだシンジは、ふと自分の掌の匂いを嗅ぎ「取れないや、血の匂い。」と沈んだ顔でポツリと呟く

シンジ、病院に搬送される

▶

ミサト、シンジの無事を喜ぶ

▶

初号機、自力で使徒から脱出

▶

初号機、暴走

▶

シンジ、母の思い出に包まれる

©GAINAX・カラー/Project Eva ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

A.D.2015

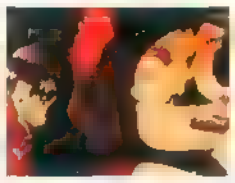
07 ミサト、使徒の動向を調査する

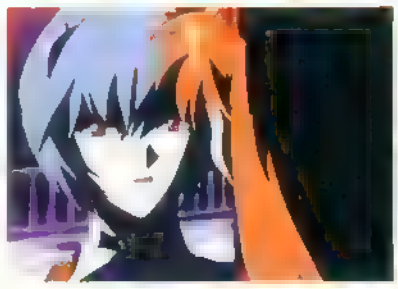
打開策を求めてミサトは奔走するのたか

初号機と街を飲み込んだ影は直径600mを越えたところで拡大を停止した。ミサトはヘリを飛ばし、自ら敵の様子を窺う。初号機のアンビリカル・ケーブルは先がスッパリと断ち切られていた。初号機とシンジはどうなったのか……。「シンジくんが闇雲にEVAを動かさず生命維持モードで耐えることができれば、16時間は生きていられるわ」。生死にかかわる事項を淡々と述べるリツコに対して、マヤはちらりと咎めるような視線を向けた。

影の拡大は止まったものの、侵食された建物はすっかり消えうせていた

この事態に責任を感じているのか、ミサトの表情は厳しい。一方のアスカはシンジを自業自得だと言い放つ





「あなたは人に褒められるためにEVAに乗ってるの？」シンジをなじるアスカを問いただすレイ

「ミサトはいたりの言い争いを止め、シンジが帰ったら叱ってあげなくちゃと思いつめた顔で述べた

08 リツコ、サルベージ計画を立案

分析の末、地に広がる影こそが使徒の本体であることが判明した。敵の内部はディラックの海と呼ばれる虚数空間であり、打つ手はひとつしかないと、リツコはある作戦を提示する。それは大量のn²爆雷でディラックの海ごと敵を破壊するというものだった

分析結果を基にして直ちに対策会議が開かれた

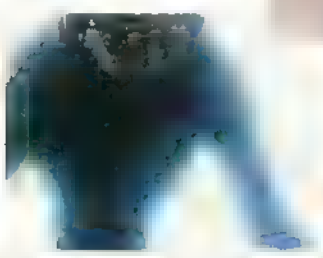
上空に浮かぶ球体こそたたの影、過きないのたと、リツコは職くへき報告をする

A.D.2015 ●ディラックの海

11 シンジ、母の思い出に包まれる

ついに生命維持機能が限界に達した時、ふいに温かな気配かシンジを包んだ「… お母さん？」つぶやくシンジの中に懐かしい母の思い出が蘇る。満面の笑顔を母に向ける幼いシンジ。「もういいの？……そう。よかったわね」幻想のなかの母か優しく囁いた

突然、輝く女性のイメージがシンジの前に現れた。



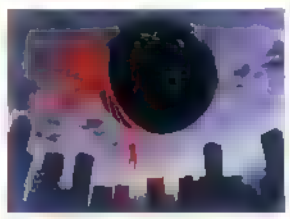
母の幻影。シンジの記憶にないせいか顔は見えない。かその声はとても優しい。

A.D.2015

12 初号機、自力で脱出

使徒を内部から引き裂いて、初号機は帰還した

リツコの指揮の下、サルベージ計画が開始される寸前、ふいに影が崩れ始めた「まさかシンジくんか？」ミサトの問いを否定するリツコ。動力ゼロの初号機が動くはずかないからだ。だか、驚く人々の前、球体内側から引き裂いて現れたのは、間違いなく初号機だった。またしてもありえない再起動が起きたのである。「何てものをコピーしたの、私たちは・・・」。易々と使徒を引き裂く初号機を見て、リツコは呆然とうめいた。



血に似た液体かほとばしる。再起動した初号機はたやすく使徒を滅ぼした。

「私、こんなのに乗ってるの？」と戦慄するアスカ。レイは何かをとがめるよう、目前の光景をにらんでいた

NERVはEVAを使って何をするつもりなのか。膨れ上がる疑問をミサトは抑えきれない。

唐突に咆哮、吹き出た液体、全身黒ずんだ初号機はまるで血まみれの獣のようだった

2015年

ミサト、使徒の動向を調査する ▶ リツコ、初号機のサルベージ計画を立案 ▶ ミサト、リツコと衝突する ▶ シンジ、もうひとりの自分と向き合う ▶

ustrat on by Takuya Io

未知の部分が多いEVAとは異なり、純粋なロボットと呼べる巨大人型自走兵器「JA」(ジェットアローン)。なお、盛大に行なわれた完成披露記念会には、ライバルであるNERVの面々も招待されていた。

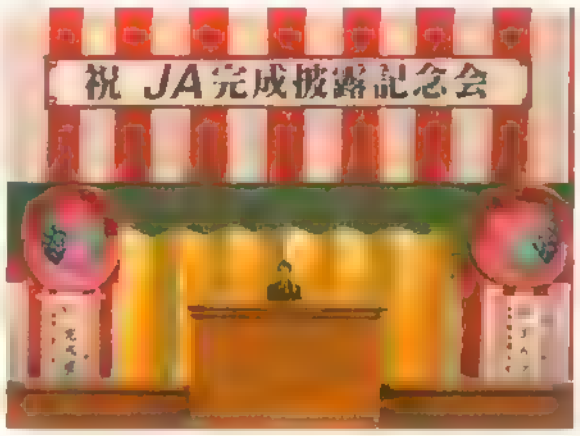
日本重化学工業共同体

組織の発足とその概要

鉄鋼、車両、船舶といった比較的重量のある製品を製造する金属工業と機械製造業からなる「重工業」。原料を化学反応によって加工し、そこから得られる物質を製品とする「化学工業」。ふたつの工業を合一した産業分野を、産業統計上の用語で「重化学工業」と呼ぶ。セカンドインパクト以降、日本国内における様々な工業分野の民間事業団体は、その勢いを急激に失いつつあった。第2次遷都計画に基づく第3新東京市の建設、さらにNERV関連施設の建設により利益を得た企業もあったようだが、そういった特殊な利権にあずかることができたものは、ほんの一握りであった。その利権から漏れた企業同士が集まり、その結果、総合的企業複合体として「日本重化学工業共同体」が誕生した。この事態に際して日本国政府——主に通産省と防衛庁主導により、あるプロジェクトが提唱される。そのプロジェクトとは、NERVが開発を進める「使徒に対抗しうる唯一の戦力」に対抗する、巨大人型自走兵器の開発計画であり、同共同体が着手することになる。

政府からの予算援助、NERVから入手したとされる資料の提供を受けた共同体は、J.A.(ジェットアローン)と呼ばれる人型自走兵器の建造に着手。使徒の襲来が現実となった2015年には公試運転を執り行なうなど、その開発力の高さを窺わせた。

しかし、公試運転という華々しい舞台で、共同体の面々にとっては思いがけない事態が発生する。J.A.が制御不能となり、都心部に向けて暴走を開始。その動力炉として搭載されていた核分裂炉が、臨界点直前に達する危機に陥ったのだ。この事態は、NERVの所有するEVA初号機および葛城ミサト一尉の活躍により、無事に終息を見た。しかし、一部の情報によれば、この暴走自体が何者かによる妨害工作であったと報告されている。さらに、それを仕組んだ組織はNERVであり、すべては対使徒戦略のイニシアチブを保つための策略であったとも言われている。それが正しければJ.A.の総合的な性能自体に問題はなかったものと見られるが、衆人環視のもとでの暴走により、その信頼性は地に落ちた。無論、以降の対使徒戦にJ.A.が投入されることはなくなり、同時に日本重化学工業共同体も人類対使徒の最前線から退くこととなった。



■J.A.
■時田シロウ
■旧東京
■日本国政府

対使徒戦を想定して建造された巨大人型自走兵器。核分裂炉を搭載しており、最大150日間の連続稼働が可能。

セカンドインパクト後の日本と復興に関わる利権

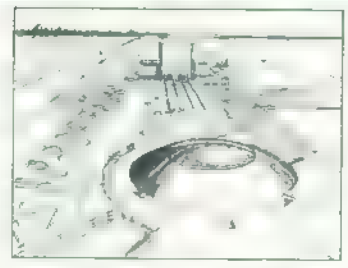
セカンドインパクトにより、国内で活動する各種民間事業団体も様々な打撃を被った。ただ、大災害自体はピンチであっても、そこからの復興には莫大な予算が投入されるため、様々な利権を得るチャンスも転がっている。特に第2次遷都計画に基づく第3新東京市、国連直属の特務機関NERVの関連施設の建設は、その利権に絡めるかどうかが企業の命運を左右する大事業だった。ただ、これらの建設計画は国連主導で推進された。この利権に絡むことができなかった企業も多く、日本重化学工業共同体も、そういった企業で構成された連合体であった。

日本重化学工業共同体を「ウチの利権、あぶれた連中」と揶揄する、サト　実際に同共同体はそう　た企業の連合体た　たようた

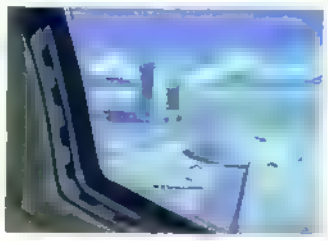
民間事業団体の活動と旧東京再開発の連動

日本国政府主導で推し進められた旧東京の再開発。民間事業団体の集合体である日本重化学工業共同体もまた、その事業に参画していたものと思われる。

水没した旧東京では、まず湾岸地域で大規模な埋め立て工事が進められた。後に「旧東京再開発臨海部」と呼称されるようになるこの地域の再開発は日本国政府主導のもとで推進された　この再開発には、第3新東京市建設の利権を得られなかった民間事業団体が集められたと言われており、そこには日本国内の工業の勢いを取り戻そうという政府の狙いがあったと考えられる。なお、日本重化学工業共同体もその民間事業団体の集合体であるが、兵器の開発という特殊なプロジェクトをも遂行していたことから、他の民間事業団体とは一線を画した存在だったと考えて間違いないだろう

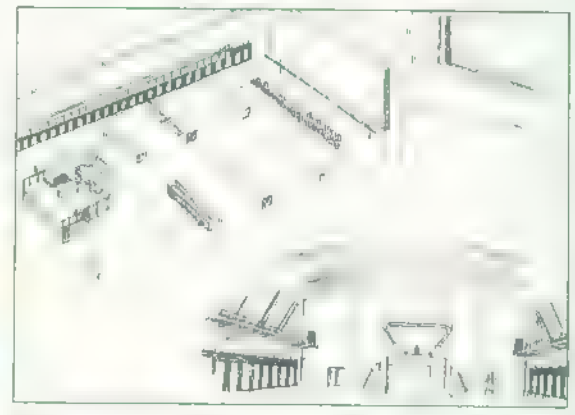


再開発が推進された旧東京の湾岸地帯。その広大な土地は、主に工業地として活用されていた　なお、ＪＡ公試運転の舞台となったのは　この地に建設された国立第3試験場だった。



国立第3試験場を中心に　近未来的な建造物が整然と建ち並ぶ旧東京再開発臨海部　ただ　少し外れると荒廃したビル群も見受けられることなどから　再開発は現在も進行中であると考えられる

ＪＡの完成披露記念会および公試運転に招待されたNERVの面々は、VTOL機に搭乗して会場に向かった　再開発を終えた　帯は工業用地として活用されていたためか　一般的な交通網は整備されていなかったようた



試験場のトーチカ内部、設けられた、J.A.制御室。試運転の模様を公開することを目的としていたためか　巨大なモニターの前には招待客用の椅子なとも設置されく、た　ちなみ、公試運転にあわせて急造されたためか　内部はコンクリート打ち出しのままだ　た　なお同施設は　公試運転中に暴走したＪＡ、屋根を踏み抜かれた

NERVへの対抗意識と日本国政府の関与

碇ゲンドウ率いるNERVは、その前身であるゲヒルン、さらに人工進化研究所時代からEVAの研究開発に着手していた。一方、共同体によるJ.A.開発プロジェクトは2009年にスタートした。J.A.の開発には、日本国政府に売り込んで「企業として絶対的な地位を確立したい」という共同体の思惑があり、開発は急ピッチで進行。約6年という驚異的な早さで公試運転にまで漕ぎ着けた。ただ、そこには「早急にEVAに対抗し得る兵器を開発したい」という日本国政府の思惑も影響を与えていた。ちなみにJ.A.の起動用オペレーティングシステムには「通産省」、「防衛庁」というクレジットが入っており、政府が当初からJ.A.開発計画に関与していたことが明らかとなっている。

ＪＡの完成披露記念会には、NERVの　行も招待された　たが　歓迎している雰囲気とは言い難く、あからさまな敵対意識すら見受けられた

ＡＴフィールドに関する極秘情報を入手して　た時田　企業による情報収集の結果とは考えにくく　政府が関与　てい　たものと推測される

巨大兵器の開発と組織としての共同体

国連の下部組織ゲヒルンでEVA開発が進むなか、日本重化学工業共同体はそれに対抗するかのように兵器開発に着手、J.A.開発プロジェクトが推進されていた。

豊富な人材や研究開発力を活かし、2009年からJ.A 開発計画を推進することとなった日本重化学工業共同体。この活動には、NERVが保有するEVAに対抗できるだけの兵器を開発し、日本国政府に売り込もうという事業団体としての意図があったものと思われる。代表である時田シロウがとりまとめた開発は順調に進み、2015年には巨大人型自走兵器J.A.が完成。国立第3試験場にて、NERVの葛城ミサトや赤木リツコをはじめとする招待客の環視のもと、公開試運転が行なわれた

●巨大人型自走兵器 J.A.

↑ ＊使徒との格闘戦を視野　入れた人型兵器　核分裂炉を搭載　、最大150日間の連続稼働が可能　なお　遠隔操作で制御されるためパイロットは搭乗しない

●共同体代表 時田シロウ

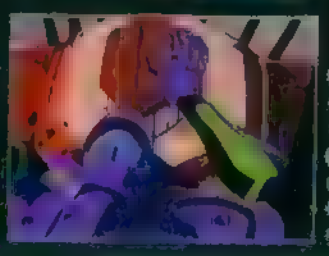
←ＪＡ開発責任者。ただ緊急時、内務省長官、伺　を立てるなと　その立場は絶対的なものではなか　た

追加報告

J.A.の信頼性と能力

日本重化学工業共同体が開発計画に着手してから、僅か6年の歳月で動き出したJ.A.。公試運転での事故によって信頼性は地に落ちたものの、これは仕組まれたものであり、J.A.自体に不具合はなかった。ゆえに、本来の人型自走兵器としての信頼性や能力は、実際のところ未知数といえる。ただ、公試運転の時点でのJ.A.は、A.T.フィールド展開能力は有していないことが判明している。対使徒戦においては、敵のA.T.フィールドを無効化することが最も重要である。A.T.フィールドを破れるのは、A.T.フィールド(あるいはそれに匹敵する圧倒的な火力)だけと言われており、使徒との格闘戦を前提にした陸戦兵器として、公試運転時のJ.A.は不完全なものだったと言わざるを得ない。ただ、共同体代表である時田シロウもこの点については言及しており、A.T.フィールドに対抗しうる装備の実装は「時間の問題」だったとしている。

考え得る数々の問題点を挙げていくリツコ。時田はそれらすべてに逐一返答をし、逆にEVAを排除する意思を見せていた。これはJ.A.の性能に対する自信の表れとも受け取れる。



都心に向かって暴走を続けるJ.A.と、都心への侵攻を阻止せんとするEVA初号機。余計な衝撃を与えないようにしていたためか、暴走機も押し止めておくのが精一杯だったようだ。

©GAINAX・カラー/Project Eva ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

戦略自衛隊兵器

日本国政府

日本が有する世界屈指の軍隊

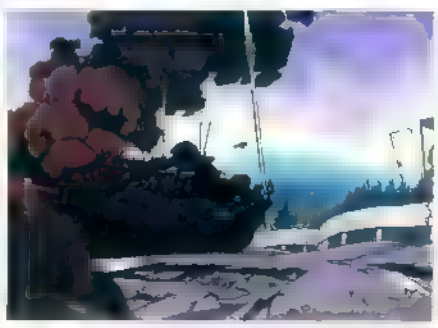
Japan Strategy Self Defense Force

セカンドインパクト後の混迷した世界では各地で様々な紛争が起こった。2003年、東シナ海の南沙諸島において中国とベトナムの軍事衝突が発生。これを契機に国防省直属の戦略自衛隊が創設された。

火種である南沙諸島は豊富な海底資源を持ち、中国、ベトナム、マレーシア、台湾などの国境線が絡み合う。さらに世界でも有数の海運ルートであるため軍事的価値も大きい。そして2015年現在もこの地を巡るテロが絶えない状況が続いている。

国際情勢は予断を許さない状況であったと考えられ、自衛隊という防衛力を国連に供出した日本国は自国を防衛する新たな力を欲した。しかしながら、戦略自衛隊の性格は、専守防衛を旨とする本来の自衛隊とは理念を異にする。世界でも有数の戦力に数えられ、弾道ミサイルのほかBC兵器までも所有していることから、明らかに自衛以上の装備を保有した軍事色の強い組織だといえるだろう。

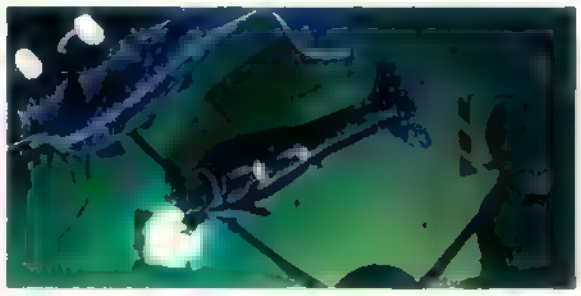
世界有数の戦力はNERV本部直接占拠のために投入され対人戦闘のエキスパートによって使徒以上の被害を与えた



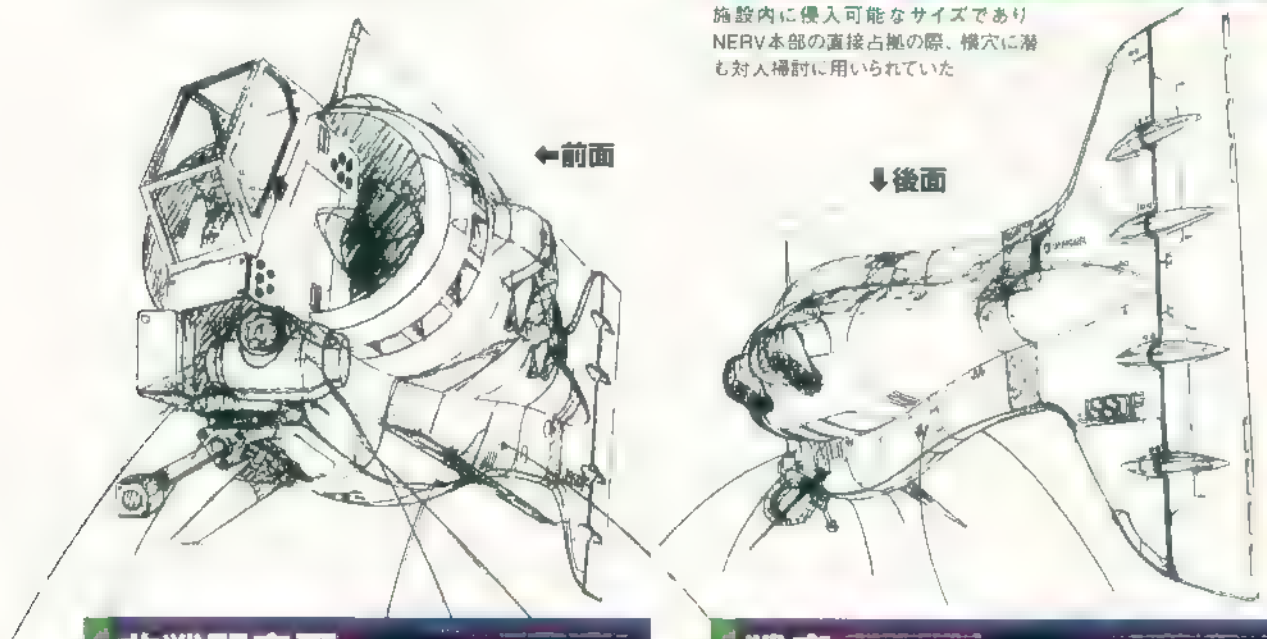
対人戦闘には強力無比を誇るものの通常兵器の通じないEVAに対しては最新鋭の軍隊も無力であった

軽戦闘機

VTOL式の小型戦闘機。機体上部にはロープ状のアンテナ、下部には高度なセンサーを6本備え、主に哨戒、対人制圧用として使われるものと考えられる。武装は機首下部の単装機銃。ハリアーのようなターボファンエンジンに似たエンジンを積み、両サイドに2基ずつあるエンジンノズルの向きを変えることで垂直離着陸を可能としている。



施設内に侵入可能なサイズであり NERV本部の直接占拠の際、横穴に潜も対人掃討に用いられていた



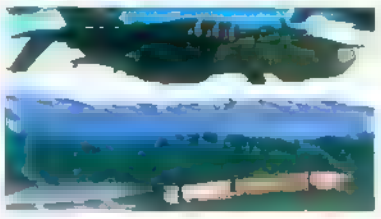
重戦闘機

戦略自衛隊仕様のVTOL式戦闘機で、グリーンの専用塗装が施されている。小回りが利くため対テロ制圧など局地的な戦闘に向いた機体といえよう。

EVA弐号機に対し攻撃を仕掛けるも、ATフィールドを破るほどの火力を持たないため一方的に破壊された。唯一、アンビリカル・ケーブルの切断に成功したことが戦果といえる

大型機

戦略自衛隊仕様の爆撃機。巡航ミサイルを底部に搭載可能な戦略爆撃機と思われ、同組織が自衛以上の戦力を行使可能だと示す航空戦力である。



空対地ミサイルによってEVA弐号機を攻撃するが、直撃しても何らダメージを与えることはできなかった。しかし長射程を有していたため、反撃による全滅は免れている。

非戦闘車両

NERV本部の制圧に際し戦略自衛隊約一個師団が投入された、通信車や補給部隊も同行している。

NERVでも使われている警備車と同様の車両を改良し、指揮車両としている

直接戦力のほか兵站支援のための人員や車両が次々と第3新東京市へと侵攻する

爆雷投下車両

多連装ロケットシステムの弾頭に爆雷を用いた自走発射機と思われる。本部にある地底湖への攻撃を想定し対水中用の兵装を持つ。

地底湖でEVA弐号機が確認された際に機雷を投下。皮肉にも弐号機の起動、[illegible]役買ってしまった

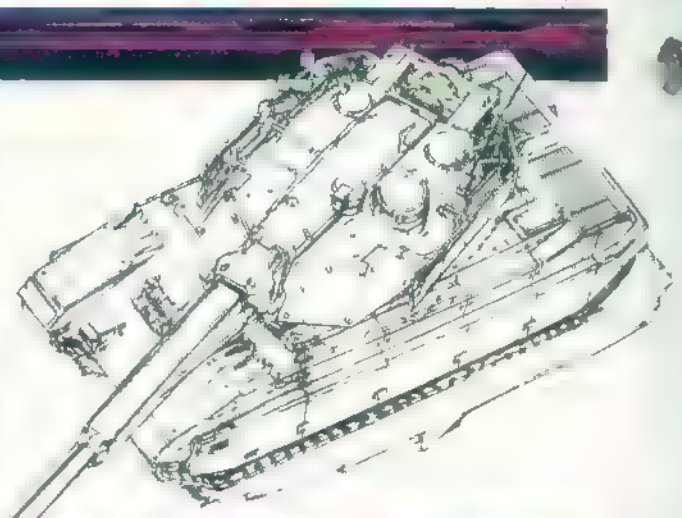
- 日本国政府
- NERV本部強制接収
- A-801
- 戦略自衛隊技術研究所

第2新東京市に政府を置く日本国。ゼーレの情報に踊らされ、戦略自衛隊を動かしてNERV本部の直接占拠を試みる

戦車

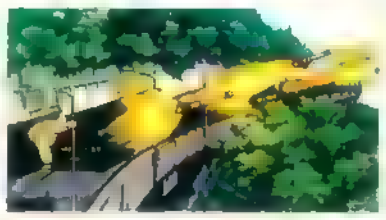
大型の主砲を備えた主力戦車。サイドスカートの形状から90式にも似ているが、第三世代の改良を施された発展型とも考えられる。航空戦力と連携し、NERV本部の観測地点を潰していった。

イナズマのマーキングが見られる砲塔。発煙筒発射器のほか両サイドに装甲板が備わっているのが確認できる

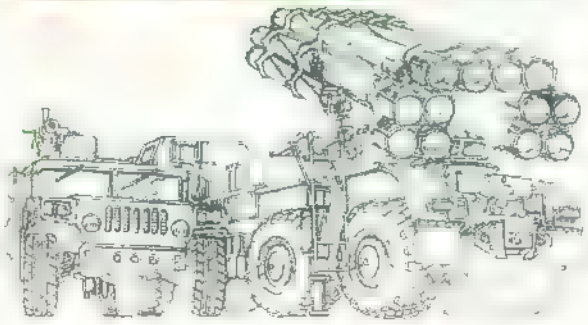


ロケットランチャー車両

戦略自衛隊仕様の6連装型の自走発射機MLRS。短時間で大量の火力を投入できる「Multiple Launch Rocket System」(多目的ロケット発射システム)を持つ。そのほか、旧ソ連が使用していたカチューシャタイプの車両も装備している。

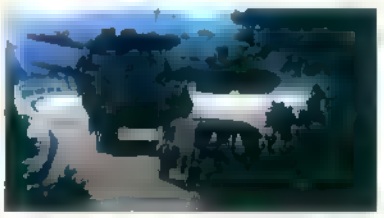


長距離火力支援兵器でありながら近距離でEVA弐号機を攻撃したため、反撃で壊滅した

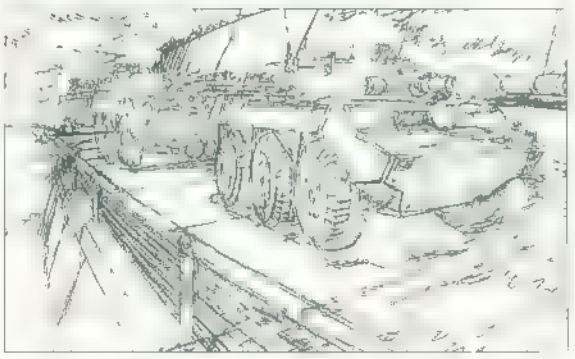


装甲車両

無限軌道を用いない装輪式の装甲戦闘車両。整地の行き届いた日本では装輪式の有効性が高い。6輪式で機動力が高い分、装甲は劣ると思われる。



74式戦車に似た旋回式の砲塔を持ち、車体は87式偵察警戒車に似た形状をしている。



©GAINAX・カラー/Project Eva ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

チェロ

正式にはヴィオロンチェロ（violoncello）。ソロで演奏可能な独奏楽器であり、合奏などでは低音部を受け持つヴァイオリン属の弦楽器。音域が人間の話し声に近いと言われ、優しい音色を持つ。「先生」の勧めで碇シンジが5歳の頃からたしなんでいる楽器。その腕前は確かなようで、シンジの演奏を聴いた惣流・アスカ・ラングレーが、「結構いけるじゃない」と珍しく彼を褒めたほど。

母ユイの墓前から帰ったシンジは、無伴奏チェロ組曲の第1番ト長調BWV1007前奏曲を弾いていた

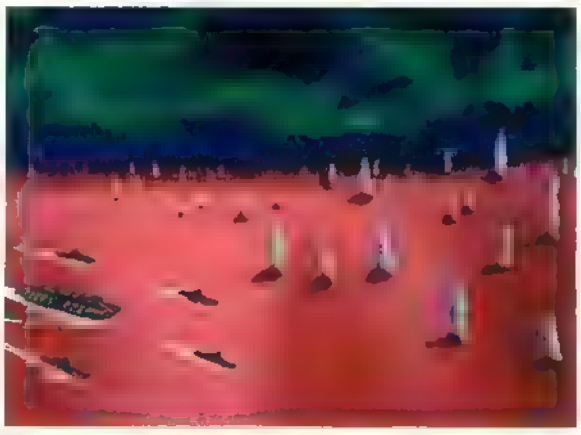
地下第2実験場

EVAに関する実験が行なわれていたゲヒルンの施設。2004年、碇ユイが"イレギュラーな事故"によって消滅した場所でもある。2015年時にはNERV本部のセントラルドグマ下層部に位置し、建造に失敗したらしき数多くのEVAが破棄されていた。碇シンジは「EVAの墓場」と呼び、赤木リツコは「ただのゴミ捨て場」と語った。

幼少時のシンジもこの実験場を訪れており、母が消えるのを目の当たりにしていた。しかし14歳となった彼にその記憶はない

地球環境

セカンドインパクトの発生により地球環境は大きな変化を見せた。南極の氷が融解することで海面が上昇し、人間が生活可能な陸地は半減。また、地軸が傾いたことにより全世界的に気候が変化、日本は四季を失い常夏の国となっている。気象の変化は生態系にも多大な影響をもたらし多数の種が絶滅したが、現在は蝉など、一部の生物は生態系が戻りつつあると葛城ミサトが碇シンジに語っていたらしい。



南極大陸自体も消滅。大気成分が変化し、微生物に至るまで全生物が徹底的に死滅している。そのためか現在の海面は赤く変色した上、塩の柱がいくつも伸びるという様相を呈す。

チャット式シリーズ 中学歴史

対話形式で解説されているらしいシリーズものの歴史参考書。人類補完が行なわれたと思しき、「EVAのパイロットではない」碇シンジの可能性の世界のひとつで、彼の自宅の机の上に置いてあった。

高校入試を視野に入れた参考書で、「難問もしっかりわかる」のがウリ。門倉一という人物が監修しているらしい

中央作戦司令室

発令所と称されることもあるNERV本部の中枢施設。使徒の襲来など緊急事態に備えて多数のオペレーターが駐在しており、作戦行動の立案や指示、索敵や分析などの情報処理を行なう。ジオフロント内のメインシャフトに添う形で造られており、複数の階層に分かれた構造を持つほか、正面に主スクリーン、左右側面と後方にもスクリーンがある。最上部には碇ゲンドウ総司令と冬月コウゾウ副司令が構える司令席があり、その下にあるオペレーター席には作戦の指揮を執る葛城ミサトと赤木リツコが控え、それぞれ直属の部下となる日向マコト、伊吹マヤのほか、中央作戦室付オペレーターである青葉シゲルが常駐。さらにその下部にはMAGIシステムが設置されている3ヶ所の総合分析所があり、最下層には左右の壁に沿って伸びる形で設置された左右の副発令所がある。また、発令所には第1と第2があり、第1発令所はNERV本部発足時より、第14使徒ゼルエルに破壊されるまで使用された。それ以降は予備の第2発令所が使用されている。なお、青葉のような中央作戦室付オペレーターは、「家に帰れるだけまだマシ」という勤務スケジュールらしい。

戦艦の艦橋のような構造を持つ中央作戦司令室。下部前方には状況に応じて用いられる二層の投影スクリーンで立体的に情報が表示される仕組みである

中央統括指揮車

松代の第2実験場において、EVA3号機の調整および起動実験を統括した車両。14式大型移動指揮車と思われる

数人の米国スタッフに加え、本部からは葛城ミサトと赤木リツコがこの指揮車に乗り込み、3号機の起動実験に立ち合った

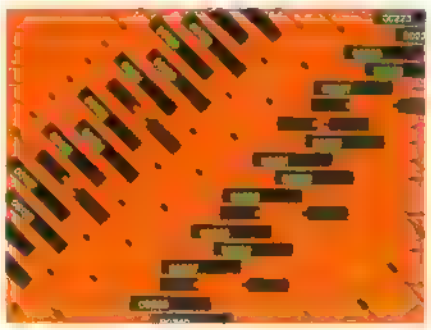
中央病院

NERV本部内にある病院施設。かなりの規模であり、ロビーなどもある。EVA操縦者が負傷した場合などに収容され、その際は第一脳神経外科で治療を受けることが多い。また第5使徒ラミエルの加粒子砲で碇シンジが負傷した際、この病院の緊急処置室に収容されて処置を受けたのち、第3外科病棟に移されている。なお、鈴原トウジがEVA操縦者となることを承諾する際に出した条件は、第3新東京市内の病院に入院中の妹を、ここへ転院させることであった。

案内プレートから第一脳神経外科、第二外科、放射線診断科などがあるようだ。そのほか院内のアナウンスから第一内科の存在が確認できる。おそらく総合医院だと考えられる

中枢神経素子

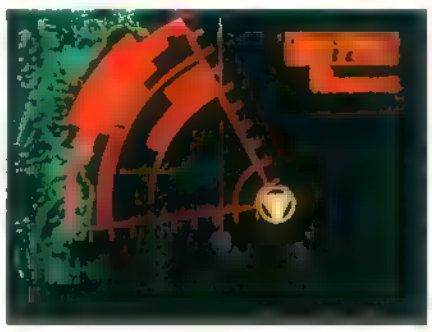
EVAと操縦者の神経伝達を介するために必要な神経系、電気系変換インターフェイス素子と考えられる。操縦者からの神経パルスを、インターフェイス・ヘッドセットなどを通じて中枢神経素子へと送り、そこで電気信号へと変換。EVAの神経を介して人体内の電気信号と同様の処理を行なうことで、操縦者の意志通りEVAを自らの手足のように動かせるものと思われる。なお、素子とは、電子回路などにおいて独立した固有の機能を持つ個々の部品のこと



EVA零号機起動実験の第3ステップにおいて異常が発生。その際、中枢神経素子に拒絶が発生した

中部警戒管制司令部

第9使徒マトリエル襲来の際、その進路予想図を作成して府中の総括総隊司令部へ送った自衛隊地方司令部。総合警戒管制室のモニターに映された図に名称が表示されている



使徒が旧熱海方面に上陸すると割り出した中部警戒管制司令部。事実、第22警戒群日御前崎SSが上陸を確認した

中和

A.T.フィールドを展開することで対象のA.T.フィールドに干渉を行ない、その絶対的な防御を無効化させること。使徒との戦闘において欠かせない行為であり、これを行なうことができるからこそ、EVAだけが使徒に対抗できる唯一の兵器だとされる。ただし、A.T.フィールドを中和しても高い防御力を持つ使徒も中には存在する。中でも第14使徒ゼルエルは、中和が行なわれた状態でもEVA弐号機の銃火器による攻撃をものともしなかった。

A.T.フィールドの中和を示すグラフ。なお、一方的に対象のA.T.フィールドを干渉する際は"中和"ではなく、赤木リツコによって"侵食"と称される"ともあった。

徴発令状

強制的に物資を取り立てることを許可する書状。NERVの要請により日本政府が発行し、ヤシマ作戦の際、第5使徒ラミエルのA.T.フィールドを長々距離から破るための道具として、戦略自衛隊つくば技術研究本部より試作自走陽電子砲を接収する際に提示された。なお、接収にあたった葛城ミサトは「可能な限り原型を留めて返却するよう努める」と語っていたが、結局返却は成されず、後に改良を加えられて大出力ポジトロンライフル改として第15使徒アラエル戦に用いられている。

徴発令状

本国政府は特務機関Nerv(以下、甲)に対し、
3項により、戦略自衛隊技術研究所(以下、
有する試作自走陽電子砲(以下、当該物件)を
務に充当する目的において徴発し、その保

強制的な力を持つ書類を日本国政府に発行するよう要請できるのは、超法規的な組織であるNERVならではのことである。

諜報2課

NERV保安諜報部のうちの課のひとつ。要人の身辺警護等を行なうことが主な任務だと推測される。冬月コウゾウが拉致された際、彼の捜索を行なうも、その首謀者である加持リョウジによって煙に巻かれていた。また、護衛対象であるセカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーの失踪を見逃したうえ7日後に発見という、葛城ミサト曰く「2課らしくない」手際を見せている。そのことに対して、日向マコトは「嫌がらせじゃないんですか、作戦課への」と答えており、多少の確執がある様子。保安諜報部も参照。

副司令拉致事件の犯人とされる加持と過去に個人的なつながりを持っていたミサトを拘束したのも、諜報2課の人間であろう。

直結回路

操縦者が直接EVAを起動、操作できるように作られた回路。回路は独立しており、発令所からの操作は不可能である。

碇シンジがEVA初号機の連動回路をカットし立て籠もった際、エントリープラグ内のLCL圧縮濃度を限界まで上げられ、直結回路を使う間もなく気絶した。

チルドレン

エヴァンゲリオンの操縦適格者のこと。そのいずれもが14歳の少年少女であり、見出された順に序数が振られていく。また、母親がいないことも選出条件と思われるが定かではない。人類補完委員会直属の諮問機関であるマルドゥック機関により選出され、特務機関NERVに登録されるが、マルドゥック機関はダミーであり、実際はNERV本部（厳密には赤木リツコと思われる）がコアとの適合性の高い人物を選んでいた。番号順に、ファーストチルドレン綾波レイ、セカンドチルドレン惣流・アスカ・ラングレー、サードチルドレン碇シンジ、フォースチルドレン鈴原トウジ、フィフスチルドレン渚カヲル、以上5人のチルドレンが確認されている。なお、第3新東京市立第壱中学校においてシンジらが在籍していたクラスには、チルドレン候補が集められていた。本来ならば複数形の"children"という単語が、適格者の総称としてだけではなく個人にも使用されているが、その理由は不明である。

フィフスチルドレンである渚カヲルは、チルドレンのことを「仕組まれた子供」と称していた。全てを知っているらしき彼だからこその言葉であろう。

CATEGORY つ

通過儀式

人間の成長過程において、次の段階へ至る際に執り行なわれる儀礼。民俗学者アルノルト・ファン・ヘネップは、世界の様々な文化で行なわれている「ある状態から別の状態へ移行する際の特別な様式」を通過儀礼（rite de passage）とした。また、キリスト教での洗礼など、宗教的意味合いを持つイニシエーションも通過儀式のひとつといえる。すべての使徒を殲滅したのち、人類補完計画について「これは通過儀式なのだ。閉塞した人類が再生するための」と、セーレのSEELE12が碇ゲンドウと冬月コウゾウに語っている。その後「滅びの宿命は新生の喜びでもある」との言葉があるため、"人類補完計画によって人類が一度は滅びること"が通過儀式にあたるのだろう。

通常回線

一般の電話回線。浅間山地震研究所からNERV本部へと直接電話をかけた葛城ミサトは、碇ゲンドウへA-17の発動を至急要請している。成体となる前の使徒発見は、盗聴の容易な無線電話を使ってでも迅速さを優先するべき情報であったようだ。なお、赤い色の守秘回線はカードキーを通してロックを解除してから使う。

通常回線の盗聴を危惧した青葉シゲルに、その後ミサトの言葉で守秘回線にすぐさま切り替えたと思われる。

通常兵器

EVA及びn²兵器以外の兵器の総称。その攻撃性能ではA.T.フィールドを突破するに足る十分なエネルギー量を生み出せないため、使徒には全く通用しない。そのため対使徒戦においては、牽制程度に用いられることが多い。

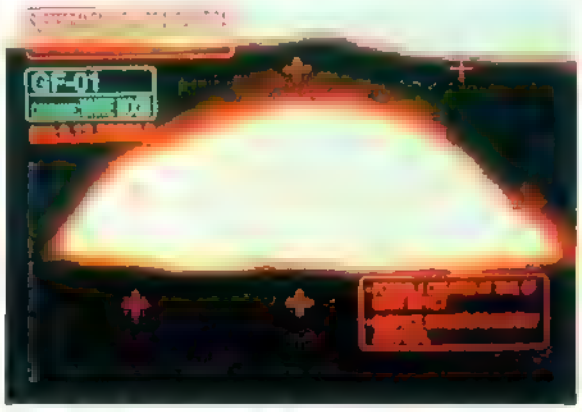
国連軍の総力をあげた猛攻も、使徒にダメージを与えることはできなかった。

月

地球にとって唯一の衛星。西洋東洋を問わず神秘的な象徴

©GAINAX・カラー/Project Eva ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

としてとらえられてきた。第15使徒アフエルを殲滅するために投擲されたロンギヌスの槍は月軌道に乗り、月面の南東に位置するWALTER#クレ　タ　付近で確認されている。なお、人類の源たるリリスの卵は「黒き月」、使徒の源たるアダムの卵は「白き月」と呼ばれている。



コードネーム「WHITE MOON」と名付けられた南極の大空洞。調査では　その表面は明らかに人工物であり、ジャイアントインパクト時にできた空洞と思われると記してある

机

中学校の学習机。人類補完が行なわれたと思しき、「EVAのパイロットではない」碇シンジの可能性の世界のひとつで、彼の机には“明日香”との仲を冷やかしたイタズラ書きある

“明日香”との相合い傘が書かれた机　「あんたバカア」は“明日香”「いやーんな感じ」は相田ケンスケ「おもろ、夫婦♥」は鈴原トウジのラクガキたろう

つまみ

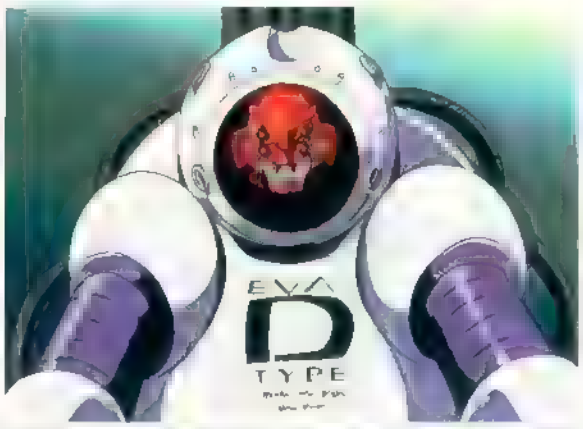
酒の肴。葛城ミサトのマンションにある冷蔵庫には、主にお酒に使うためのロックアイス、大量のビール、つまみしか入っていない。この中身から彼女の人物像が垣間見えよう

なぜか冷蔵庫に入っているやきとりとタンの缶詰　そのほかはチ　ズと　食べ物は酒のつまみしかない

CATEGORY て Glossary

D型装備

EVAが局地戦に赴く際の特殊装備。「D」は「Diving」の意と推測される。具体的には耐熱耐圧耐核防護服で、これを装備することにより、水中や溶岩内等の特殊な環境下における活動が可能。ジムスーツと呼ばれる硬式潜水器に酷似したデザインで、大腿部に熱交換ジェネレーターを持つ。また、胴体、両腕、両足に繋がる5本のパイプに冷却液を循環させることにより、内部温度の上昇を押さえる仕組みも備える。ただし、本格的な戦闘をこなせるようには設計されておらず、機動性は低かった。武器は専用カバーに収めたプログレッシブ・ナイフを金属製ベルトで左脚にくくりつけ、強引に装備しているのみである。なお、プロトタイプの零号機には規格外のため対応しておらず装備はできない。第8使徒サンダルフォンが浅間山火口溶岩内に発見された際、弐号機がこのD型装備の状態で同使徒捕獲作戦に従事した。



頭部のヘルメット前面には透明な円形窓がある　この部分から光学モニタ　による視界を確保しているものと推測される

D級動務者

NERV動務者の等級のひとつ。第11使徒イロウルがMAGIをハッキングして自律自爆が決議された際、このD級動務者に対する退避命令が下された。また、第10使徒サハクィエルがNERV本部を目指して落下していると判断された際などにも退避命令が出されている。D級がある以上は他の等級も存在するものと考えられる。おそらくNERVやEVAの運用にさほど支障をきたさないレベルの動務者がD級と推測される

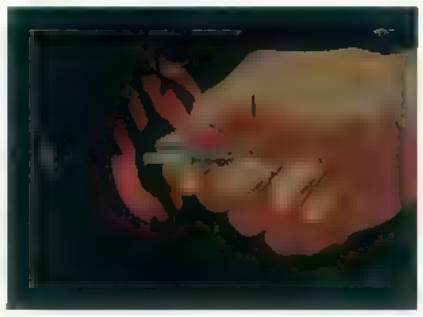
D-17

NERV権限における特別宣言のひとつ。内容は第3新東京市を中心とした半径50km以内の全市民を避難させるというもの。その際、松代にMAGIシステムのバックアップを依頼している。第10使徒サハクィエルが襲来した際、碇ゲンドウ総司令と冬月コウゾウ副司令が共に不在、且つ第10使徒サハクィエルの電波妨害により連絡が取れなかったため、その時点での最高責任者であった葛城ミサト三佐の判断により発令、日本政府各省庁に通達されることとなった。なお第3新東京市の全市民のほか、NERVの部内警報Cにより非戦闘員とD級動務者にも退避命令が下されている

D-17発令により　国連軍の大型輸送ヘリ　ス　ハ　スタッフが大量に投入され　迅速な退避が行なわれた

ディーゼル

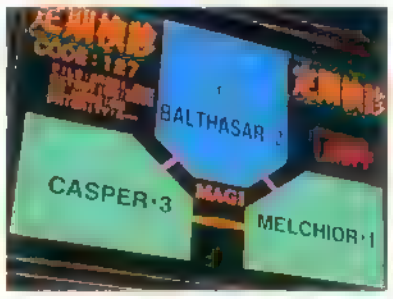
軽油や重油を用いる内燃機関。ガソリンエンジンと比べて燃費がよい。EVAのケイジには非常用のディーゼル発電器が常備してある。第3新東京市がジオフロントごと停電したためEVAの起動を人力で準備する際、エントリープラグ挿入のための電力を発電するために用いられた



セルモ　タ　をまわして非常用ディーゼル発電器を起動　発電した電力でEVA各機にエントリープラグを挿入した

定期検診

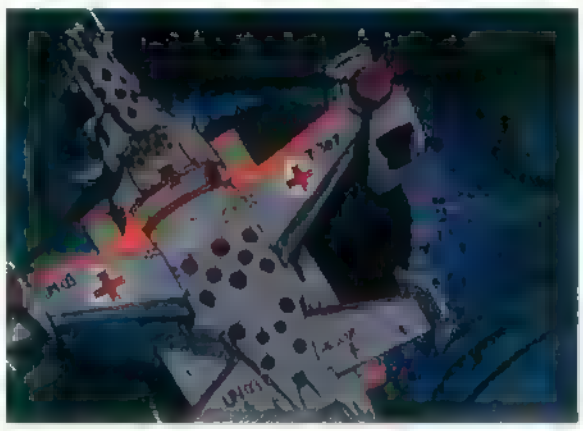
定期的に行なわれるMAGIの点検整備。オートパイロット実験を行なう直前に、第127次定期検診が行なわれた。なお、「検診」は人間に対して使う言葉だが、人格移植OSを用いた生体コンピュータであるMAGIシステムの整備にも「検診」を使う



NERVスタ　フの手　による診察後は自己診断モ　ドに入る

偵察用無人ヘリコプター

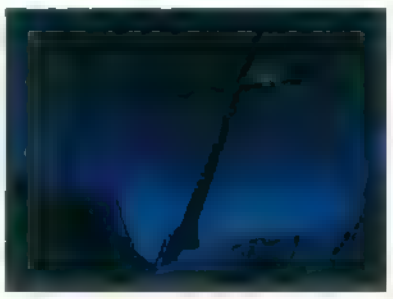
国連軍の所有する無人の偵察用ヘリコプター。ブレードを4枚持つローターを2基備え、安定性が重視された機体。データの収集や映像の転送などを行なう



偵察専門の機体のほか救護用のタイプもあり　負傷者の搬送などにも使われている

停止信号プラグ

EVAの活動を完全に停止させるため　エントリ　プラグ挿入口に挿入されるプラグ　他のプラグ類とは異なり　十字架の形状を持つ　エントリ　プラグ挿入の際に排出されるか、それ以外の通常時には常に挿入されていると思われる



初の起動実験で制御不能に陥った零号機は、硬化ベークライトによって固定されたうえ、停止信号プラグを挿入され凍結処理が行なわれた

停電

NERV本部の構造を知るために何者かが起こした人災。第3新東京市だけではなく、電源が正、副、予備の3系統確保してあり、電源がすべて落ちることは理論上あり得ないジオフロントまでもが停電した。生き残った電源はすべてMAGIとセントラルドグマの維持に回され、全館の生命維持に支障をきたした。その際、電力に頼らず人力での作戦行動が行なわれた。なお、発令所は大量のロウソクで明りを確保した。

本部初の被害が、使徒ではなく同じヒトの手で成されたのは皮肉といえよう。

ディラックの海

赤木リツコ博士により、第12使徒レリエルの本体内部にあると推測された虚数空間。直径680m、厚さ約3nm（ナノメートル）の極薄の空間を内向きのA.T.フィールドで支えることにより発生させているものらしい。EVA初号機は、別の宇宙に繋がっているとされるこの空間に一時的に取り込まれている。なお、学術的には1933年度ノーベル物理学賞を受賞した物理学者ポール・ディラックにより、1928年に打ち出された量子力学の基礎方程式ディラック方程式において、負のエネルギー状態が現れるという問題を解決するにあたり1930年に見出された概念がディラックの海である。その内容としては、負のエネルギーの粒子で満ちているこの宇宙では、そこにエネルギーが加わることにより正のエネルギー粒子が発生し、電子が抜けた孔（正孔）が反対の電荷を持つ反粒子として観測されるというもの。画期的な考え方として注目されたが、のちの物理学者によってその概念の拡張や解釈の見直しも行なわれている。なお、リツコはNERV第2支部の消滅事故も、このディラックの海に飲み込まれたものと推測していた。虚数空間も参照。

レーダーやソナーも帰ってこないほど広く、真っ白な空間がレリエルの中には展開されていた。これがリツコの言う「別の宇宙」であろうか。

適格者

EVAの操縦者を指す言葉。母親のいない14歳の少年少女の中から、マルドゥック機関により適格者として選出されるシステムになっている。チルドレンを参照。

できそこないの群体

葛城ミサトが人類補完計画を考察する際に、人類を指して言った言葉。彼女の言葉を借りれば、人類補完計画とは「できそこないの群体としてすでに行き詰まった人類を、完全な単体としての生物へと進化させる」計画であるという。なお、SSTOの機内TVで流れるニュースによると、出生率の低下が世界的な問題となっているようだ。これが人類の種としての閉塞によるものかは不明だが、「人類には時間がない」という碇ゲンドウの言葉から、使徒襲来という直接的な危機のほかにも、何らかの要因による種の滅亡が差し迫っていたのかもしれない。

ミサトは人類補完計画により作られる世界を「まさに理想の世界」と言っていた。そこには皮肉のようなものが込められているように見受けられる。

テストプラグ

ハーモニクスやシンクロ率に関する実験や訓練などの際に、操縦者が搭乗するプラグ。NERV本部内の第7実験場などに配備されている。形状、内部共にエントリープラグとほぼ同じような造りで外装はオレンジ色。なお、模擬体に挿入されるシミュレーションプラグとは異なるもので、EVAが収容されているときに満かっている赤い溶液と同じものと思われる液体に満かった状態にて使用される。

外装以外はエントリープラグと全く変わらないように見えるが、テストプラグは実験場内に固定されている。

デストルドー

死に対する本能、破壊・回帰を望むエネルギーのこと。タナトスと概ね同義。生に対する本能で、一般的に性的衝動を意味するリビドー（エロス）の対義語で、マゾヒズムを説明するために考え出された概念である。碇シンジのサルベージの際、EVAのPSYCHIC ESSENCE THRESHOLD SIGNALグラフの表示においては、タテ軸、ヨコ軸共にマイナスの場合に“DESTRUDO”となる。また、赤木リツコがL.C.L.プラント内に浮かぶ綾波レイの肉体を破壊した際、彼女の手に持たれていた携帯端末モニターには“DESTRUDO RELEASE”との表示があった。ゼーレが目指した人類補完計画の際には、拠り代になったEVA初号機に搭乗していたシンジの心理グラフがシグナルダウンし、デストルドーが形而下化されていくとのアナウンスがされている。

ゼーレの面々が「EVA初号機パイロットの欠けた自我をもって人々の補完を」と言っていたことより、シンジの精神においてデストルドーが形而下化されることは補完計画の条件のひとつであったものと推測されるが、詳細は不明。

電源車

第3新東京市から離れた土地など電源のない場所でEVAを運用するため、電力を供給するために使われる車両。第5使徒ラミエル戦、第7使徒イスラフェル戦、第13使徒バルディエル戦の際に使用が確認されている。

EVAを動かすほどの電力を供給するとなれば、当然、何台もの電源車が必要となる。

電源装着トレーラー

アンビリカル・ケーブルをEVAに装着するためのクレーン車。第3新東京市から離れた場所でEVAを運用するための車両のひとつ。電源車と共に配車されるようだ。

第7使徒イスラフェルが発見されたのが紀伊半島沖であったため、同使徒との戦闘の際に駿河湾で使用されている。

©GAINAX・カラー/Project Eva. ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

第2話「見知らぬ、天井」

敵との戦闘中に制御不能となるエヴァ。それが予定以上の力を発揮する。
シンジの切れた精神が敵を撃破したのだ。その後のエヴァと使徒襲来に対する
人々の反応。シンジにとって、見知らぬ土地での知らない人達との新しい生活。
蘇る戦闘の恐怖。ミサトとシンジの交流。

第3話「初めてのＴＥＬ」

シンジの転校。そこで出来る、初めての親友。
第３新東京市での大規模な迎撃作戦。

第4話「１４歳、始まりの日」

シンジの誕生日。息子への祝いの言葉を持たぬ、父親。
シンジを想うミサトの決意。
特務機関『ネルフ』の人々のドラマ描写。

第5話「レイ、心のむこうに」

レイとシンジの交流。巨大な力を見せる使徒の恐怖。
エヴァの敗北。危機迫る、研究所。

第6話「決戦、第3新東京市」

人類対使徒の総力決戦。エヴァの逆襲。ネルフの人達を少し理解するシンジ。

第7話「人の、造りしもの」

民間企業により実用化されたエヴァ以外の人型兵器。
その実験模様。ネルフの疎外感。

第8話「アスカ、来朝」

アスカとエヴァ弐号機、そして加持の登場。戦艦対巨大ロボット。
空母甲板上での格闘戦。

KEYWORD

第4話「14歳、始まりの日」

本編における第四話は、第3新東京市の新しい生活にシンジがなじめずに、疎外感を募らせる話となっているが、企画書の第4話もコンセプトは同様である。しかし、本編ではシンジの家出を"柱"として物語が進行していくのに対し、企画書ではシンジの誕生日というエピソードを絡めることで、彼の心の内を浮き彫りにしていくことが考えられていた。

第弐話より。他人を拒絶するように、ウォークマンを聴きながらベッドにうずくまるシンジ。初期のシンジは、他人とコミュニケーションを取ることが苦手な少年であり、その戸惑いが強調されていた。

第四話でシンジは家出をする。この時もイヤホンをしたままである。そして、うつむきながら街をさまよい歩いた。

企画書では、シンジの誕生日パーティをクローズアップすることで、逆説的にシンジの孤独感を際立たせるようになっていたようだ。本編ではシンジの家出というより直接的な形で彼の居場所のなさを見せている。

第四話のクライマックス。トウジとケンスケが第3新東京市を去ることになったシンジの見送りにやってくる。青春ドラマを彷彿とさせるような友情の萌芽のシーン。

KEYWORD

第5話「レイ、心のむこうに」

第5話、第6話は企画書段階から前後編として構成され、使徒との総力戦が見せ場となっていたようだ。また、企画書で第5話は「シンジとレイの交流」と銘打たれており、実際の第伍話、第六話においてもシンジとレイの心の触れ合いやすれ違いが盛り込まれている。さらに本編では"レイの視点"でシンジとゲンドウを対比させるような構成（ふたりともレイに対して同じような行動を取る）にもなっている。

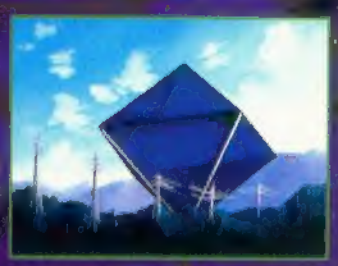
第六話のラストシーンにおいて、レイは作中ではめずらしい笑顔を見せる。レイがシンジに心を開き始めた瞬間。

第伍話では、第壱話でレイが重傷を負っていた理由が、零号機の実験によるものと判明する。

ゲンドウを信じないシンジをなじるレイ。ゲンドウに対するレイの想いが垣間見える。

第伍話より。暴走した零号機からレイを救い出すゲンドウ。ふたりの繋がりを見せる場面だが、第六話ラストでシンジも同じ行動を取り、父子の対比としても演出されている。

第伍話ではレイの部屋が登場。冷蔵庫と包帯が印象的な彼女の部屋は、非生活的であり、臨床実験施設をも感じさせる。



第伍話、第六話に登場する使徒ラミエル。企画書同様にNERVが総力を持って挑む強敵であるとして描かれている。

KEYWORD

第8話「アスカ、来朝」

登場シーンから高飛車で自信満々、ふてぶてしさ全開のアスカ。遅めの登場であるにも関わらず、強烈な個性によって強烈な存在感を発揮する。

シンジに着替えを覗かれ激昂するアスカ。最初からシンジとは、いわば犬猿の仲として描かれている。

国連軍のフリゲート艦の間をジャンプしながら、派手な戦闘を繰り広げてゆく弐号機。そのコンセプトも企画書通り。

ガギエル対弐号機。初登場となる弐号機が活躍する第八話は、企画書で予定されていた通り海上戦、および海中戦が見せ場となる。

加持の登場は、企画書でも第8話からとなっている。本編の第八話では、加持は戦闘機での脱出劇も見せた。

アスカと加持が初登場する第八話。ふたりの登場話数は、企画書通りである。また、企画書にも「空母甲板上での格闘戦」と記されており、海上戦となることも当初から予定されていたようだ。しかし、「戦艦対巨大ロボット」との記述が見られることから、本編とは大きく異なる戦闘シーンが考えられていたのかもしれない。

エヴァンゲリオンのコラボレートアート【EVA AT WORK】

12人のクリエーターとのコラボレーションが行なわれた"EVA AT WORK"。そこでは様々なスタイルでエヴァが表現されている。

"WORK／職業"をテーマとした様々なコラボレーション

"EVA AT WORK"は『新世紀エヴァンゲリオン』放送10周年を記念してスタートしたWeb企画である。2006年1月から12月までの1年間、毎月様々なジャンルのクリエーターたちがエヴァを題材とした作品を発表。その反響は大きく、国内だけでなく、海外においても話題となった。

毎回、様々な作品が登場した"EVA AT WORK"だが、当初は各業界のアーティストたちにエヴァを題材としたイラストを描いてもらい、それをweb上で公開する予定であった。しかし、ギャラリースペースPOINTを主宰する古井真也氏をディレクターとして迎えたことで、企画は飛躍を見せる。古井氏はコラボレート企画を進行させる上で、"職業"をテーマとして選んだ。そして、"イラスト"という形態にこだわらず、表現方法は各クリエーターへとゆだねた。それは皆すべからく何らかの仕事を選び、それぞれの方法論や答えを見いだしていくからこそ、仕事に向き合っているすべての人に、その人ならではのエヴァの表現があるはず、との考えによるものであった。それだけにクリエーター＝職業の選定は、意外性を重視して行なわれたという。アニメーションと各職業の間にあるギャップと共通点を見せるためにも、多くのクリエーターが候補として上っていたようだ。教師、落語家、スポーツ選手など、その職種は多岐に渡り、様々な作品アイディアが練られていた。そんな多くの候補から最終的に12人のクリエーターが厳選され、それぞれの中にあるエヴァの影響を自分の仕事で表現することにより各作品が誕生することとなった。

すべての仕事への敬意、働くことの「かっこよさ」、「おもしろさ」などが"EVA AT WOTK"では表現されている。そこには当時、主人公であるシンジたちと同世代であった視聴者――放送終了から10年の時を経て、自分の仕事と向き合うことになり、理想と現実のギャップ、他者とのコミュニケーションなどに悩んでいるであろう彼ら――へ向けて発信されたメッセージとしての側面もあった。エヴァがそれぞれのクリエーターに大きな影響を与えたように、"EVA AT WOTK"の作品もまた、かつてシンジたちと同世代であった彼らにも何かしらの影響を与えるものであるに違いない。

特記事項

EVA AT WORKオリジナルグッズ

様々なクリエーターとのコラボレーションが行なわれたEVA AT WORKでは、オフィシャルグッズの制作も行なわれた。グラフィックデザイナーの戸取瑞樹氏による第1回作品である「敵スタイル」のテキスタイルをプリントしたTシャツ、EVA AT WORKの第1～6回作品のポストカードセットである。どちらもエヴァオフィシャルショップのEVANGELION STORE（http://www.evastore.jp）で販売されていた。

使徒をモチーフとしたテキスタイルをプリントしたポップなアイポリーのTシャツ。サイズはLとMの2サイズ。各4,410円（税込）。

様々な仕事に就くクリエーターの作品で話題を巻き起こしてきたEVA AT WORK1月～6月までの6作品をポストカード化。各作家プロフィールも収録されている。840円（税込）。

※掲載している商品は販売終了している場合があります。ご了承ください。